
星を射落とす日

砂漠ネコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星を射落とす日

【Nコード】

N7980W

【作者名】

砂漠ネコ

【あらすじ】

「一番近くにいるのに、行きずりの女たちの方が君のことを知ってる」

国から追放された主人公エセルと、彼女を守るために国を出た剣士レグルス。

旅の途上、大国サジタリアスに入った二人。立ち寄った交易都市でエセルは突如として攫われる。誘拐犯はレグルスの異母兄シリウスと名乗り「お前が欲しいと思ったからだ」とのたまうが……。

弓の腕前しか取り柄のない女と、惚れた相手には手を出せない男の
ファンタジー・ラブコメ。主人公以外の視点を入れるため【付
きの回は三人称となります。

弓使いの朝

寄り添って眠るようになったのはいつからだったろうか。

寝起きの回らない頭でふとそんなことを考えてしまった。

触れ合った肩越しに伝わる熱をずいぶん前から知っているような気もするけど、霞がかった記憶を掻きまわしてみても正確な所はよく分からない。

国にいたころはこんな風に眠ることなどなかったことは確かなんだけれども。

まだ青い夜気が残る早朝、野宿の場所を選んだ巨木の傍らで、いつものごとく私の方が早く起きた。

旅の相方はたいへん寝起きが悪いので、起こすのは私にとって朝に必ず待ち受ける厄介事のひとつなのだ。

朝とはいえまだ薄暗いからを起こすのはもう少ししてからがいいだろう。

寝起きの同行者の凶暴性が身にしみている私はそう判断して、同じ毛布にくるまって寝ている奴の顔を改めて観察する。

旅囊を枕にして眠っている男の顔はすぐ間近にある。

吐息が頬にかかるほどの位置だ。

夜を共にした恋人同士みたいな距離と体勢だが、私とこいつの間に男女関係が発生したことなどただの一度もない。

昔は単なる腐れ縁の同じ部隊に所属する同僚で、今は単なる旅の同行者だ。

こいつに至っては私を女だと認識してるかどうかさえ、かなり怪しい。

・・・それにしても無駄に綺麗な顔だよなー、睫毛で影ができてるしさー。

私の隣で眠る無駄に綺麗な顔の持ち主はレグルスという。

旅暮らしが長いため私が適当に切っている金髪は朝の薄い光を反射して蜂蜜色に輝いている。無造作に襟足にかかる長さの金髪に縁取られた顔は、通った鼻梁から今は閉じられている瞼、形の良い口唇まで男らしく整った容貌を作り上げており、端麗な顔立ちと評しても言いすぎではないところが憎らしい。

「・・・とりあえず、起きるか」

何だかとても空しくなつて私は毛布からはい出て、朝の身支度を整えた。

野宿に選んだ場所からすぐの所に綺麗な泉があり、洗面も水分補給も手早く済ませられる。

とっても水質が綺麗なので、水面に自分の顔が映るけどよく見ないでスル。

ああ、まあ女としてあるまじきことだとは分かっちゃいるけど、目やにとかさえついてなければ後はどうでもいいと思ってしまう。平凡な容姿をしていることを自覚しているので、先ほど観察した『無駄な美形』顔と比べるとダメージがでかすぎて朝から落ち込むはめになるからだ。

黒に近い焦げ茶色の髪を無造作にくくり、髪と同じ目の色をした可もなく不可もない顔をした女が私だ。観察しても面白くも何ともない。

泉のほとりで、朝の習慣となつてゐる基礎鍛錬を始める。

まずは身体をほぐし、手指の感覚を蘇らせる。関節と筋肉が柔軟に、しかも思い通りに動くことが全ての武術の土台だから念入りに行う。

自慢するが私は弓矢の使い手だ。

他に取り柄がないともさんざん言われてきたが、国にいた時から弓の腕前だけは天才的だと称賛され続けてきた。

女だてらに弓を扱うには特に筋力の維持に気を使う。男どもは何もしなくてもある程度の筋肉は維持できるし元から力もあるが、女である私の筋肉は運動をしなければすぐ脂肪に変わってしまう。

腕の筋肉と体勢を支える足腰、そして背筋を鍛える運動は毎日欠かすことはできない。

一通りの基礎鍛錬を終えた後は愛用の弓を使つての稽古だ。

弓筒から赤い矢羽の矢を選び出した。染料で鮮やかな赤に染まつた矢羽は遠くからでも見分けがつきやすい。

私が弓術に魅せられた要因でもあるのだが、長弓を射る動作というものはシンプルにしてひどく美しい。

構えて、矢をつがえ、引き、狙いを定め、放つ。

五つの射撃動作の中に全てが含まれ、矢の命中率も威力も射手の技量しだいでもともでも変化する。弦を引き絞る時も、離す時も左右の手が震えることはあつてはならない。

静かに水中を行く魚のようになめらかに、何の抵抗もなく全ての動作を行うのだ。

呼吸を鎮めて、空に向かって弓を引き絞る。

放った矢は狙い定めた通りに飛ぶ鳥を射落とした。

うん、いつ見ても惚れ惚れするような弓の腕前だ、私。

まあ誰も見てないけどね。

凶暴な男の起こし方

寝起きが非常に凶暴な男を起こすいい方法があるのなら誰か教えてほしい。

共に旅をし始めてからそろそろ一年になろうかというのに、私は毎朝びくつきながら試行錯誤している。

今朝の試みとして射たばかりの力モをさばいて適当に木の棒に刺して焼いたものを、空腹の猛獣に差し出すがごとくレグルスの鼻先に近付けてみた。

経験則その一、レグルスは敵の気配と食い物の匂いには獣並みに敏感である。

案の定、香ばしい匂いのする肉を近づけた途端、奴はかっと目を開いた。

現れたのは野性味の強いあざやかな緑の瞳。

エメラルドや翡翠に例えるよりも、深い森の生命力をそのまま宿したようだと言った方がしっくりくる美しいけれども凶暴な色だ。

緑の双眸は寝起きの機嫌の悪さのせいで人間らしさのかけらも宿していない。

その目で焼けた肉を捉えたかと思うと、レグルスはがぶりと肉に食らいついた。

ひいい、やっぱり手でつかむ間もおしんで食らいついたよ、この男。

棒の先に肉を刺しといて良かったー。

経験則その二、食い物を近づける時は手に噛みつかれないように注意すること。

そう、前は手で食い物を差し出して、見事に食らいつかれたのだ。歯型が残ったし、かなり痛かった。レグルスの犬歯が無駄に鋭いせいもある、

よし、次回からはこれで行こう。

耳元で起きると長い間叫び続けるのも、ゆすり続けるのも、物理的攻撃をして後で報復されるのも本当にこりこりだ。

私が心の中でこれまでの苦難の日々を回想していると、肉を食い終えてようやく本格的に覚醒したのかレグルスの瞳に人間らしさが出てきた。

寝起きの奴は単なる凶暴な野生動物です。覚醒しなくては言葉も発しませんよ。

「……エセル、お前なあ、もっとマシな起こし方はできないわけか？ あれか？ 俺は闘技場で飼われてる檻に押し込められた腹ペコの獅子か何かか？」

ぐるる、と獅子がうなるみたいな重低音の声でレグルスが不平をこぼしやがりました。

「本当に檻に入っている分、闘技場の獅子の方がまだ安全だねー」
「ほー、じゃあ、お望み通り指の一本でも噛みちぎってやろうか」
「やめて、真面目にやめて、弓が引けなくなる」

ひたすら正直な感想をもらっただけだったのに、うすら寒い殺気と共に恐ろしいことを言われぶんぶん首を振る。

レグルスは有言実行の男なので本気で怖い。

青くなった私の顔色を見て気が済んだのか、ふんと鼻をならしてレグルスは睨んでいた目線を私から外した。そうして寝起きの猫よろしく伸びをすると、無造作な切り方でも豪華な金髪をがしがしきながらにやりと笑う。

「安心しろよ、お前の唯一の長所を奪うまねなんざしねーから」

獲りたての美味しい肉が食えなくなるしな、というレグルスの心からの本音は朝の爽やかな空気にひどくそぐわなかった。

追放の理由

なんで私が国を追放されるはめになったか、話そう。

私の名前はエセル。

パイシーズという国のド田舎で獵師の娘として生まれ、11歳の時に戦争で村が壊滅し孤児となったので生きるために軍に入った。

このご時世、珍しくも何ともない生い立ちの人間である。

レグルスとは15歳の時に出会った。

忘れもしないどしゃ降りの雨のあの日、『街でケンカふっかけてきた元気なガキだよ』と隊長が言っただけでボロ雑巾のような状態の少年を私に押しつけてきたのだ。

介抱してみるとあんなりに綺麗な金髪と顔をしていたので、呆気に取られたのを覚えている。

それからレグルスはうちの部隊の一員に加わり、華やかで剣技にも長けていたため、あっという間に部隊の中心と目される存在になった。

私はと言えば、孤児になって死にかけていた時に隊長の世話となったのが縁で隊長の遊撃部隊にいた弓の腕前だけが取り柄の弓兵だったから、輪の中心にいるレグルスとはそんなに関わることもなかったように思う。

パイシーズ王国は北方の隣国ジェミニと数十年に及ぶ戦争を続けており、戦としては小康状態という名の平和が来てまた戦をするという状態だった。

私は隊長にくっついて戦場に出ては敵が気づかない所から矢を射かけ、敵部隊を混乱させるのが主な役割で『夜陰の射手』と蔑まれつつも恐れられていたらしい。

レグルスはその剣の腕と敵を斬り伏せる戦い方の苛烈さで有名となり、隊を任されてもおかしくはない武勲を立てていたが、素行が悪いいせいで上層部に目をつけられ相変わらず遊撃部隊の切りこみ要員として戦場を駆けていた。

そんな日々が五年ほど続いた時、隊長が戦闘で命を落とした。残忍にして類まれな馬術の才を持ったため自ら騎兵隊を率い戦場に立つジエミニの兄王ザムエルに斬り殺されたのだ。

その後の記憶は私が混乱していたせいでひどくあいまいだ。

副隊長の命令を無視して単身でザムエルの騎兵隊をつけ狙い、暗殺者のごとく粘り続けた結果、三ヶ月後にザムエルの眉間を射抜いた、らしい。

そんなに時間がたっていたという自覚は全くなかったけれども、あの男を射殺した瞬間だけはよく覚えている。

まさか自分が殺されることはない、という驚愕に満ちた顔。

眉間に突き刺さる矢の力のまま仰向けに馬上から落ちる瞬間を、確かに私は見た。

その後、栄養失調と疲労で死にかけていた私を味方の兵士が見つけ、パイシーズ軍の陣に連れ帰ったのだと言う。

軍に帰ってすぐは私の扱いは英雄のそれだった。

正直、愛国心のかけらもないので隊長の仇を討ったということ以外、私は何も考えていなかったからその扱いにとまどった。

敵国のトップ、双子の王の片割れを殺した私にどんな報償が与えられるかで部隊の連中が盛りあがっていたようだ。

しかし、私に告げられたのは国外追放だった。

いくら軍規違反を犯したとはいえ、総大将の一人を討った者に重い処罰が下ったことに皆が驚いた。

この処罰にはからくりがあったのだ。

ザムエルの死に続いて弟王テオドールも死に、政権が代わったことによる一時的な和平が成立したということも理由のひとつだ。

けれど最も大きな理由は、ある伝説によるものだった。

『ジェミニの双王』の片割れを殺したことでふりかかるという災いを回避するために上層部は私を追放することに決めたのだ。

旅の始まり

本当かどうかは知らないけれど、王族というものは不可思議な力を持つらしい。

たとえば私が生まれた国パイシーズの王族は白銀のウロコと鋼鉄の背ビレを持つ巨大な魚に変化し、水を操ることができるという。

本当にそんなことができるなら、ぜひ戦争で活かしてくれ。

敵船の一つでも沈めてくれ。

何度そう思ったか分からないが、パイシーズの王族は王宮から滅多なことでは出てくることもなく、戦場に立つことなど皆無だった。

だから私ら庶民の兵士はそんな伝説ほとんど信じちゃいなかったし、伝説の詳しい内容も知らなかった。

けれど王族を頂点とする国の上層部はそういった伝説を『事実』と認識している。

まあそりゃ、自分自身が巨大な魚に化けることができたりしたら嫌でも事実と分かるだろうから、国王本人は伝説が嘘か本当かを知って当然だろう。

腹が立つのは自国に都合の悪い伝説を、意図的に庶民には広めないようにしていやがりましたことだ。

お綺麗な大理石で造られた神殿で、笑うしかないことにお偉い大神官サマから私は『事実』を聞かされた。

『敵国ジェミニの王族は双子として生まれたならば一つの命を二つの身体で共有し、不可思議な力を持つ。怪力や互いの間で通じる思

念、そして呪いの力など。双子の片割れが死ねば、数刻後に残った一人の心臓も動きを止めるが、その間に呪いの術は完成してしまう。……つまり兄王ザムエルを仕留めたおぬしに向けて、弟王テオドルの呪いは既に完成してしまったのだ。このままではパイシーズ全土にまで災いがふりかかるだろう』

だから、と重々しい声で大神官は続けた。

『おぬしには全ての呪いを背負って、国から出て行ってもらう』

そうすればパイシーズは呪いを免れる。

本気でそう思っている連中に、反吐が出た。

伝説も呪いも真実か否かなんて私には分かりつこなかったが、ただ一つ確かなことがあった。

『ジエミニ王族の呪い』を『事実』と認識しているこの連中は、双王のどちらかを殺させたならばその兵士を捨てることを初めから決めていたのだ。

それがたまたま私であつたというだけ。

あの最悪の戦場で隊長が殺されるのではなく、隊長がザムエルの首を斬り落としていたとしたら、国から捨てられるのは隊長だったということだ。

隊長は守りたいものがあつて戦っていた。

そんな一兵士の意志も、誇りも、この連中にとって狂信を妨げるざわめきにもなりはしない。

めまいに似た怒りをやり過ごしたあと、私に残ったものは何もな

かった。

もう何もかもどうでもよかった。

隊長はもういない。憎い仇ももう殺した。

やるべきことも、戦う理由も、帰る場所も、国も、ない。

麻痺した感覚でとらえた世界はぼやけていて、船に乘せられて見知らぬ土地に放り出されるまでの記憶は自分のものではないようだ。

見知らぬ土地で私の腕をつかんだ、見知った男の声が私を正気に返らせた。

「お前のことは隊長から頼まれてんだ。……だからこんなところで死にそーなツラでふらふらしてんな、馬鹿が。お前が死んだら、密航してきた俺の苦勞が水の泡じゃねーか」

これが私とレグルスの旅の始まりだった。

交易都市サディラにて（前書き）

性的なことに関する発言、またメインヒーローの女性関係に言及する表現があります。苦手な方はご遠慮ください。

交易都市サディラにて

国境となつてゐる森林地帯をぬけて、大国サジタリアスに入つたのは太陽が真上に差し掛かる頃だった。

街道に合流し、馬を走らせることしばし。

草原の緑と大海の青に囲まれて、その都市はあつた。

交易都市サディラ。

南大陸に向けて巨大な帆船が出発する港で有名な商業の街である。

*

*

*

宿を取る時に必ず出てくる質問がいい加減うざい。

だから私は無駄に背の高いレグルスの影に隠れて、無表情でいる。

「お二人はご夫婦ですか？」

「……………そーだよ」

うわあ、嫌そうな上に投げやりな返事だなあレグルス。

無表情な妻にヤケクソ気味な返答をする夫。

どう見ても離婚寸前の夫婦ぐらいにしか見えない私たちに、宿屋の主人はにこやかな表情で余計な忠告をしてきた。……………空気読めよ。

「寝台が一つの部屋のが、だいぶ安く済みますがねえ、旦那」

「やめてくれ、まじでやめれくれ。野宿の連続でほんとくだくだなんだよ。街に居る間ぐらいはゆつくり休みてーんだ」

「おおっ！　じゃそっちの淡泊そうな奥さんの方が積極的ってえこ

とで……」

「すいません、もう疲れたんで部屋に上がってもいいですか」

下品な方向に話を持っていきらしい宿の主人にそう言い捨てて、私はとつと部屋に退散した。

レグルスが仏頂面で「そーだよ」と言ったのにはわけがある。

夫婦でもない男女が同じ部屋に泊まるとなると、厄介事がついてまわるからだ。

かといって血縁関係があるようには全く見えないので、兄と妹とか姉と弟とかいった嘘は使えない。使えなさ過ぎて逆に不信感倍增になることを、この旅の間に知った。

「おいこらエセル。お前、自分だけとつと退散しやがって……あのエロ親父に妙な薬売ってる店まで教えられそうになった俺の苦労も考える」

「おつかれー。けどさ、レグルスが誤解招く発言するから、からまれるんだと思うよ。というか、私が『嫌がる夫に無理やり迫る好色女』と誤解されたんだから、謝るべきはむしろレグルスだと思う」「うるせー。『妻の期待に応えられない情けない男』扱いされた俺の方がダメージがでかい」

そう言って荷を放り出すと、レグルスは寝台の一つにどさりと腰を下ろした。

いつも偉そうに胸を張っているくせに、今は心なし猫背気味だ。

「ああそうだ。それに関連して質問があるんだけども」

「……………なんか嫌な予感しかしねえ……………」

緑の瞳に不信感まるだしの野良猫みたいな光を宿らせて、にらんでくる。

口元も警戒のためか若干ひきつっているが私は気にしない。

ふと考えてしまっただろうにも頭から離れない疑問を解消したいのだ。

「野宿ではくっついて寝てるのに、なんで宿屋では一つの寝台を嫌がるの？　というか、いつから傍で寝るようになったんだけ？」

記憶があいまいで思い出せない、と続けるとレグルスはあんどりと口を開けた。

そうして次の瞬間には、お前はタコか、と言いたくなるほど顔に血をのぼらせる。

そんなに怒らなくても……。

おーおー怖いねえ、美形の怒り顔は。慣れてるから別に怖くないけど。

「お前は馬鹿か！　いやお前こそが馬鹿だ！　おい馬鹿！」

びしいっ、と指をつきつけられて思わずハイと返事をしてしまった。

「仮にも女なら少しは危機感知能力を持てよ！」

「……危機？　え？　なにレグルスって私の貞操狙ってたの？」

「……………っ！　んなわけあるか！」

「だよー」

国にいた時からレグルスは女によくもてた。

軍人に憧れる町娘から城に勤めるメイドさん、商売女はもちろん果ては貴族のご令嬢にまで熱心な信奉者がいたほどだ。

旅の行く先々でも華やかな美貌と均整のとれた体つきは女性の視線を一人占め。

おかげで私は色気のある関係でもないのに、嫉妬をびしと受けまくっていた。

完全なとばっちりだよ。

そんなわけでレグルスは女に不自由などしていない。

時々、色っぽいおねーさんとイイコトしてるのも私は知っている。何でだか分からないがレグルスは私にそのことを隠したいらしく、バレてないと思ってるみたいだがバレバレである。

というか、まあレグルスに抱かれてめろめろになった彼女らが見当違いの攻撃を私にしかけてきたからなのだが。

「レグルスが色気もへったくれもない私に手を出すなんてありえないし」

「……………当たり前だろ」

そんな不機嫌そーな顔で豪華な金髪をかきむしらなくても……。誤解なんぞしてないというのに。

「だからさ路銀の節約のためにも、からかわれるネタをなくすためにも、これからは寝台一つの部屋に」

「断る」

「せまいから？ お互い軍隊生活が長かったし、今さらそんな些細なことで眠りづらいつてこともないで」

「断るって言っただろ」

二度も最後まで言わせてもらえなかったよ。

……まあレグルスにもこだわりがあるのかもしれない。

なんかこう、寝台に対する特別なこだわりが。

……なんかやだな。寝台フェチとかだったらどうしようか。

会話はこれで終わりとばかりにそっぽ向いてフテ寝を始めたレグルスに、溜息をつく。

野宿ではいつの頃から寄り添うようになったのか、結局分からずじまいだ。

V S看板娘 …… いや戦わないけど

一夜明けて、現在。

さっそく宿屋にいづらくなりそうな事態が発生しました。

…… やだなあ、もう十日分の宿泊費払ってあるのに。

私たちがみたいな流浪の、しかも兵隊崩れだからまともな雰囲気を持つてない旅人は信用されないんで、宿屋の支払いは前払いの上、一括です。

夫婦と偽らないと宿が取れないことなんてザラなのです。偽ってもカタギとは思ってもらえませんが。

「どうしてアンタみたいな冴えない女があの人妻なワケ？ 分不相応って言葉、知ってる？」

朝っぱらから私にジェラシーファイトをしかけてきたのは、宿屋の（自称）看板娘でした。

年齢は二十歳にはいつていないだろう。

十七、八といったところか。

今が旬！ の若さによる自信過剰な匂いがむんむんですよ。勝気そうなハッキリした顔立ちにいていねいに巻いた赤毛、極めつけは大きめのリングをつめたみたいに盛りあがったバスト。

白い清楚なエプロンが窮屈そう。

身体のラインまるわかり。若い娘さんがいいのかそれで？ ヘタしたらここが娼館だと勘違いされるのではなからうか。

「ちょっと、なによその目。なに気取ってるのか知らないけど、ア
ンタ、邪魔だからとっとと出て行ってくれない？」

「……宿を出てくのは十日後の予定なんですが」

真面目に答えたのに、すごい目でにらまれた。
昨日からよくにらまれるなー私。

ちっ、と舌打ちしたあと看板娘は急に表情を変えた。
立派な胸をそらし、勝ち誇った表情でふふんと笑う。

「私、知ってるのよ」

何を、と聞くべきなのだろうか。

……いや聞かない方が神経を逆なでしない気がする。

「アンタ、女としてあの人に相手にされてないんでしょ。父さんが
言ってたわ」

あのエロ親父に顔が似なくて良かったですね。
出てきた感想がそれだけなのだが、これも言わない方が賢明だろ
う。

そう判断しただけだったのに看板娘はなにかリアクションが欲し
いらしく、イライラし始めた。

あ、さっき食べたベーコンが奥歯にひっかかってら。

……塩味がきつすぎたなあ、ここの朝食。

ちなみに朝食は一人で食べましたよ。

ええ、必要ない限りレグルスを起こす努力なんぞしません。

奴は絶賛、爆睡中のはず。

別のことを考えてるのがばれたのか、看板娘が爆発した。

「すましてるんじゃないわよ！ 昨夜だってベッドがきしみもしなかったくせに！」

聞き耳を立てていたんですね、分かります。

レグルスの美形顔に一目惚れして気になって気になってしかたなかったんですね。

……こういうのも職権乱用と言っのだろうか。

「ええまあ、二人とも爆睡してましたからね」

旅は体力を使う。当然のことだ。

きちんとした寝台で眠るなんて久しぶりのことで、私もレグルスも夕方からダウンしていた。

別々の寝台じゃなくても気持ち良く爆睡できたとは思っが。

「そうでしょそうでしょ。あーんな素敵な人がアンタ相手にヤル気になるわけないじゃない。だ・か・ら・賞味期限切れの妻に代わって、あたしがあの人を癒してあげるって言ってるの。だから、出かけての」

いえ初耳ですが。

まあこの看板娘からは初耳だが、似たようなセリフは言われ慣れている。

ならば対処法は一つ。

「そうですか。じゃ、ごゆっくり」

「どうしても出てかないって言うなら……っ、え？」
「ですから、ごゆっくり。私は日が暮れるまで宿には戻りませんから」

どうぞどうぞ、と廊下の端による。

もう出かけるところだったのだ。

ジェラシーファイトをしかけるまでもないのに、好戦的なお年頃なのだろう。

夜這いならぬ朝這いに（偽称）妻のお墨付きを得て、看板娘は目を白黒させている。

「あ、それからレグルスは寝起きが最悪に凶暴なので噛みつかれないように注意した方がいいですよ。押し倒されたら従順でいるのが快樂への道らしいです」

いつぞやの街であやかな夜の蝶である美女がとうとうと語ってくれた情報だ。

レグルスの寝起きが凶悪なのはよく知っているが、どんなに寝ぼけていてもレグルスが私を押し倒すことはないので後半はどうしても伝聞になる。

一番近くににいるのに、行きずりの女たちの方がレグルスをより知っているのだ。

そう思うと胸がちりちりと焦げ付くのを、気づかないふりをする。

呆気に取られた看板娘に手をふって、私は宿屋を後にした。

賭け事は計画的に（前書き）

評価・お気に入り登録ありがとうございます！

今回、距離の単位が出てきます。

一メートル〃約一メートルとしてイメージしてください。

賭け事は計画的に

なんというか、いい買い物をした。

うーん、さすがサジタリ阿斯。良い品がそろっている。

弓術を奨励している国なだけあって、腕のいい弓職人を優遇しているのだろう。

どうにもボロかった矢筒を新調できて大満足だ。

よくなめしてある赤茶色の肩掛けベルトの具合を確かめながら、にぎやかな大通りを歩く。

くうう、この肩に対する負荷を最小限に抑える職人技がにくい！
財布がだいぶ寂しくなっただけどそれでも悔いはないよ！

弓使いが道具をケチっては話にならない。

安物買いは結局、金をドブに捨てていることと同じなのだ。

ここは港にいたるゆるやかな下り坂。

幅の広い石畳の大通りには数えきれないほどの露店がひしめきあっている。

「おうおう、その上機嫌なねえちゃん！ どうだい、おひとつ！
今が揚げたてだぜ！」

食欲をそそる油の匂いに顔を向ける。

露店のおっちゃんよりも荒波にもまれて大漁だーとか言うのが似合いそうな巨漢が、魚の揚げ物をパンにはさんでいる所だった。

……そんなはたから見ても分かるほど上機嫌だったのか、私。

表情がローテンションすぎて分かりにくいと国では大好評だったのに。

主にネガティブな方向には感情の針がよく振れているんですがね。

どうにも気恥ずかしかったので揚げ魚入りパンを一つ買っと、そそくさと立ち去る。

……あ、うまい。香ばしいハーブと白身魚のうまみのハーモニーだ。

昼飯を済ませつつ、大通りをぶらついていると人だかりが目に入った。

もしか噂のアレだろうか？

食べ終わったパンの包みを懷にしまって、私は人垣の中に入って行った。

*

*

*

大国サジタリアスは国を挙げて弓術を奨励している。それは他国にまで鳴り響くほど、確かなことだった。

なんでも建国神話が影響しているらしいのだが私はよく知らない。意外とそういった神話や国々の事情に詳しいレグルスから聞きかじった情報である。

レグルス曰く、偉ぶった貴族連中からそこらへんにいる鼻たれ小僧まで、とにかく弓の腕を磨けとお国から圧力かけられるらしい。

どうもその情報は正しいっぽい。

こんな街中に弓の練習場がいきなりあるぐらいだ。

人垣を割って大通りの角をひとつ曲がるとかなり広い空き地にながっており、昼下がりのこの時間、お祭り騒ぎの真っ最中だった。

端的に言つと、賭け事。

ギャンブルは男のロマンとは軍にいたころ同僚たちがよく言い訳がましく言っていたセリフだが、ここにいるのも圧倒的に男が多かった。

むさいむさい！……まあ軍隊生活で耐性あるけどさ。

「さあさあ！ お次は誰が挑戦だい？ あの毒サソリの心臓を射抜けば銀貨十枚だよ！」

賭けの元締めらしい男が威勢よく声をはりあげている。

広場の突き当たりとなる建物の壁際に、いくつかの的が用意されていた。

パイプでもよく見た中心を黒に塗った円形的もあれば、見たこともないようなものもある。大きさもまちまちだったけれど、黒いサソリが描かれた的は断トツに小さかった。

的自体がスズメほどの大きさだろうか。

五十メティルほど先にある黒サソリの心臓は、かなり目の良い人間でないと視認することも難しいだろう。

……でもぶっちゃけ簡単だよな。動かない的なんて。

狩りや戦いに比べれば、子どもの遊びみたいだ。

それで銀貨十枚とは、なんてぼろもうけ。

一か月分の宿代になる。

ちやうど懐具合も寂しいし、ここはひとつ、やってみるか。

手をあげた挑戦者が女だったことに賭けに興じている見物客たちの間で、驚きと侮りのざわめきが広がった。

この分だと『私的を射抜く』に賭ける客は少なそうだ。

けっ、馬鹿にしてろ。ばーかばーか。

ふだんとことんネガティブな私でも、弓の腕前だけは自慢なんだからな！

……むなしいなー。

弓に弦をはって立ち上がった瞬間、酔っ払いのかい声が聞こえた。

「どうせ女が挑戦すんなら、もっと美人な色っぺえ姉ちゃんなら『当たり』に賭けんのになあ」

「はは、違いねえや」

よくある嘲りの一つを耳が拾ってしまったのは何だろうか。いつもなら弓を構えた瞬間から無心になれるのに。

『アンタ、女としてあの人に相手にされてないんでしょ』

宿屋の看板娘の言葉が耳に蘇る。

レグルスはある娘を抱いただろうか。

……余計なことを考えちゃ駄目だ。
というか抱いたからって何なんだ。いつものことだ。
レグルスが誰を抱こうが関係ない。そばにいてくれるなら、私は
それでいい。

抜け殻だった私を探し出して、腕をつかんでくれた。
あの熱を覚えている。
私を生かしてくれた熱を。

あの大きな手のひらで、固い剣だこのある指で行きずりの女の肌
に触れたとしても、私のそばにいてくれる。

「それだけで、十分じゃないか」

何度も出したことのある答えをつぶやく。
強くなってきた潮風にまぎれて誰の耳にも届かなかっただろう。

指先はもう震えていない。
大丈夫。視界もクリアだ。風向きも考慮にいった。

さあ、毒サソリの心臓を射抜こう。

矢をつがえ、耳の後ろまで弓を引き、放つ。

放たれた矢は吸い込まれるように心臓の真ん中に突き刺さった。

*

*

*

まったく、とんだ騒ぎだった……。

私的を外すことに賭けていた大部分の客が暴れ始めるわ、『当たり前』に賭けたものすごい少数派が狂喜乱舞するわ……正直、思い出したいくない。

銀貨を受け取って、ダッシュで逃げだしましたよ、ええ。

「ここまで来れば、もう大丈夫かな」

土地勘のない街でだいぶ走り回ったので、現在地が分からん。なんかでかい屋敷が立ち並んでいて、やけに静かな感じですよ。

「とりあえず、メインの大通りに戻っ……」

突然、口をふさがれ、身体が宙に浮いた。

とっさにもがくが背後からまわされた頑丈な腕はびくともしない。軍隊にいたから断言できる。これは鍛えられた軍人の腕だ。

なめんな、こちとら兵士だったんだ！

口をふさぐ手に噛みつこうとすると手は離れたが、叫ぶ間もなく首筋に衝撃が走った。

これは……覚えがある。あれだ、隊長の得意技だった……手刀……。

……あちゃあ、だめだ……レグルスが……怒る……。

『この馬鹿が、少しは警戒心養えよ』という説教の幻聴を聞きながら私の意識は薄れていった。

誘拐犯は狼系

鼓膜を震わせる男の声に、意識が浮上する。

重く深く、耳に心地よく響く、まあぶっちゃけ良い声だ。

……………レグルス？
なわけではない。

首筋に感じるじんじんとした痛みが、私に現在の状況を思い出させてくれる。

ああ、そっか。気絶させられて、どっかに連れて来られたってことか、私。

……………なまってたのかなあ。

レグルスが小うるさく言ってくる警戒心うんぬんの話はともかく、ロクな反撃もできないまま気絶させられるとは思わなかった。

仮にも兵士だった者として、かなり恥だ。

「……………の手配を……………に王宮への連絡を任せろ。ああそれから、期待はしていないが捕らえた連中への尋問はどうなった？」

何やら長い指示を出していたらしい男前ボイスが途切れ、別の声

がきびきびと返答をした。

「はっ！ やはり海賊は単なる隠れ蓑だったようです。スコルピオンの手の者は一人もおりませんでした」

「毒サソリは単体で動くからな……。まあいい。『宝』がこちらに戻ってきた以上、もう一度奪いに来るだろう」

「では増員の兵を領主から借り受けては……」

「陛下の望みは『迅速に、かつ内密に』だ。『宝』の奪還が果たされた今、信用に値しない兵を入れる利はない」

「はっ！ 申し訳ありません！ 浅慮なことを申しました」

どう聞いても上官と部下の会話だ。

軍にいた頃はこんな会話もよく聞いたな、と場違いにも少しなつかしくなった。

首の痛みをこらえて、そろそろと薄目を開ける。

そこは随分と高級そうな部屋だった。

レリーフを施された白い柱に、重厚な臙脂色のカーテンの対比がいかにも金持ち的な美を主張している。

歩いたらフカフカしてそうな毛足の長い絨毯。

部屋に明りを提供している花の形をしたランプも、それが置かれた猫足テーブルも、とにかく全ての調度品が無駄にきらきらしい。

見たことなんてもちろんないが、貴族の館とはこんな感じなのかもしれない。

とどめに、私が後ろ手に縛られて転がされているのは金糸で蔓草

が織られたベッドカバーの上だ。

……やばい、ヨダレとか垂らしてたらどうしよう。
めちゃくちゃ高価そうなんですけど！

ベッドの上から見る限り、この部屋に人はいない。

声は部屋の奥、わずかに開いたドアの隙間から聞こえてきているらしい。

……ここが二間続きの高級宿屋とかであることを祈ろう。

もしホントに貴族の館だったりしたら、シャレにならん。いや真剣に。

「ご苦労だった。下がれ」

「はっ！」

レグルスに似た男前ボイスが、声質に似合う尊大な口調で言う（推定）部下が部屋を出て行ったようだ。

ひかえめに閉じられたドアの音。

それに続いて（推定）上官殿の気配がこっちに近付いてくる。

え、ちょ、来ないで欲しいんですけど。

何でとっ捕まえたのかは知らんけど、捕虜への尋問は偉い人の仕事じゃないだろ！

つか、さっきも何かの尋問は部下任せだった発言してたじゃないか！

逃げたくても、手だけじゃなく足もご丁寧に縛られてるから、芋虫のごとくはうことしかできないんですよ。

軍隊生活長かったです、捕虜になった経験はないので対処方法なんて知りません。

というか本当に何で私を捕まえたんだよ！

あれか、ジェミニの王の片割れを射殺してパイシーズから追放された『夜陰の射手』だからか！

理由なんてそれしか思いつかないけど、大陸の西端と東端ほど距離のあるサジタリアスは別にどっちの国とも利害関係なんてなかったはずだぞ！

私の心の叫びも空しく、一人の男が部屋に入って来た。

第一印象は、とにかく美形。

ああ、こいつもレグルスと同じく女にもててもてて仕方がないんだろうな。

真冬の夜空みたいに冷たいのに、燃えているようなブルーの瞳。綺麗な銀色の髪は襟足のところで一つにくくられている。

……そういえばサジタリアスの貴族は男でも髪を伸ばすことが常識だとかなんだとか、レグルスが言ってたような……。

うわ、嫌な方向に予想が大当たりですか！

鍛えられた鋼のような体つきの銀髪軍人はベッドの傍でぴたりと足をとめた。

ただ立っているだけで無駄にサマになる男だ。

「起きたか。お前の名は何と言う？」

捕虜に対する尋問にしては語調が柔らかいと思うのは気のせいだろうか。

いや、さっきの部下に対する声より明らかに優しいような……？
例えるなら、さっきが狩猟犬に向けて指示を出す主の声なら、今は愛玩犬に話しかけてる甘いご主人様の声だ。

変だ。

この怜悯な美貌、という言葉がしっくりくる男が何を考えているのか全く読めない。

「……ああ、すまない。こちらから名乗った方が良かったな。俺の名はシリウスだ。シリウス・ボレアリス。北部に領地を持つボレアリス家の次男で、サジタリアス現国王陛下に剣を捧げ、仕えている」

ええと、そんなご丁寧に自己紹介されても……どうリアクションしろというのか。

気絶させられて拉致られて、縛られてる女に礼儀正しい自己紹介するか普通。

普通しないよ！

行動に整合性がなさすぎて怖いんですけど！

「ええと……あの、何で私を連れてきたんですかね……？」

拉致ったとは言わない。怖いから。

銀髪男……シリウスはその問いに笑みを浮かべた。

あ、間違った。こいつは犬のご主人様なんかじゃない。
群れを従える絶対的な力を持った、狼。

そんな凶暴な笑みだ。

鋭い犬歯が見える笑みの浮かべ方は、レグルスにひどく似ている。

「お前が欲しいと思ったからだ」

……弓使いとして、だよな？

あの的当てをどっかから見てたのだろう。

「……仕官のお誘いなら普通に話しかけてくれれば……」

「違う。俺は狙った獲物は絶対に逃がさない主義だが、今は任務中だ。口説く時間がないからこうして無理やり連れてきた」

あ、無理に連れてきた自覚はあったのか。

そこから話を通じないのかと思ってたよ。

……というか、何か今、理解不能な言葉が混じっていた気がするんだが……。

「それよりお前の名を教えろ」

「あ、エセルです」

反射的に答えてしまう。混乱しすぎて頭が働いてない。

「そうか、エセル。もう一つお前に尋ねたいことがある」

狼っぽい笑みを浮かべながらシリウスがベッドに手をついた。

そうして本当に狼とか犬とかがよくやるように無造作に私の首筋をなめたのだ。

ひひひひひひ！！

ちょ、くすぐりたい！ まじでやめろ！ やめてください首弱いんだからな！

「なぜレグルスの匂いがお前にしみついているんだ？ お前はあれの女なのか？」

首筋に与えられた感触にじじたする私を押さえつけて、にらんでくる。

こんな時でも美しいと思ってしまう青の目は、色こそ違えど……。

「……っ、れ、レグルスを、知って、るんですか？」

「あれは俺の愚弟だ」

声も、笑い方も、にらみつけてくる眼差しの強さもレグルスに似た男はそう言った。

誘拐犯は狼系（後書き）

お気に入り登録50件越え！ 本当にありがたいです！
読んでくださる方全員に心から感謝しています！

ですが大変申し訳ないことに、これから作者の生活上の都合により更新ペースが遅くなります。

可能な限りアップしたいと思っておりますが、10月の半ばまで立て込んでいまして……。

どうか温かい目で、ラブコメなエンディングにたどりつくまでお待ちくださると幸いです。

自己申告では犬系

自分よりも大きな生き物に押さえつけられる感覚は捕食される瞬間の鹿やウサギと同じなのではないだろうか。

逃げられないという絶望感と、これから食われる内臓が上げる悲鳴。

命を握っているのはいつだって強者で、弱者は悲鳴を上げるか涙をこらえるかくらいの選択肢しかない。

のしかかられた瞬間に蘇った記憶がある。

あれはジェミニとの戦況が厳しさを増してきた頃だったから、19歳の時だろう。

私たちの遊撃隊に与えられた任務は敵陣の様子を探ること。

ジェミニ軍が平野にはった陣からかなり離れた山小屋を拠点にして、見つかりにくいよう散開し情報収集を行っていた。

私は拠点に詰め、皆が持ち帰って来た情報を整理する役。

ほとんど山と同化しているような朽ちた木の匂いのする山小屋で仲間の帰りを待っていた。

たぶん、ものすごく運が悪かったのだろう。

ジェミニ軍からの脱走兵がその山小屋を見つけたのだ。

金欲しさに軍に入っただけがいいが、戦闘で命が惜しくなったクチだろう。街のゴロツキといった雰囲気のある五人の男たちは私を見るなり下卑た笑いを浮かべた。

弓以外の武器は人並み以下の腕前の私はあつという間に抑えこまれ、ささくれ立った木の床に組み伏せられた。

もがけば殴られて口の中に血の味が広がったのを覚えている。

けれど次の瞬間に血を噴き出していたのは私を押さえつけていた男の方だった。

男の腕を斬り飛ばしたのはいつの間にか戻ってきていたレグルスで、その目は緑色の炎みたいに寧猛に燃え盛っていた。

助けが来る見込がない分、銀髪の偉そうな軍人に押し倒されている今の状況の方がヤバいのかもしれない。
なんせ縄で縛られてるし。

それでも、その男が言ったことが衝撃的すぎて、蘇ってきていた記憶の光景も現在の状況も一瞬にして吹っ飛んだ。

*

*

*

ぐてい。

ぐていぐていぐてい……ぐて、偶蹄？
いや、愚弟だ。
愚弟ってなんだっけ？

自分の弟のことをへりくだって言う言葉だったような。
あれだ。実は全然そう思っていないのに「ふつつかな娘ですが……」
とか言っただけに出すのと同じ感じの語句だった気がする！

というか、

「レグルスがあなたの弟！？」
「そうだ。もつとも、異母兄弟だがな」
「じゃあ、あなたが正妻の子で、レグルスがお妾さんの子とかそう

いう……」

「それは違う」

意外なことにシリウスは律義に質問に答えようとする。
私の困惑気味にひきつった頬を長い指でなでながら、何やら思案しているようだ。

……いやいや、なでるななでるな！

首弱いつて言っただろうが！ 心の叫びで！

首筋に近いところも真面目に無理だから！

嫌なんで首をふって逃れようとしたら、あっさり顎を捕らえられた。

睫毛が振れそうな至近距離からのぞきこまれる。

「そうだな……俺とレグルスの父親のことから説明した方が分かりやすい。俺たちの父親は１８人の女を孕ませて、２１人の子どもを作った男だが」

なんかいきなりとんでもない話が出てきたよ。

「親父殿は女を籠絡するのが上手かったらしい。現に俺の母であるボレアリス家の当主が奴を悪く言うのを聞いたことがない。そしてレグルスの母親はリーオーの王族だった」

リーオー。

獅子の治める国。

私でも知っている南大陸の大国の名だ。

え……ちょっと待て。

話がなにかとんでもない方向に進んでいくんですけど。
いや、それ以上に……。

「レグルスの母親は王家を出奔した身だった。リオから遠く離れた森に隠れ住んでいたところを親父殿が見つけて口説いたらしい。レグルスが生まれた後もしくは平穩だったようだが、どうも王家がらみの陰謀で母親が殺され、レグルスは親父殿に手を引かれてボレアリス家にあずけられた。……俺が九つで、あれが五つかそこらだったな。警戒心の強い野良猫そのものの鋭い目つきをしていたのを覚えている。それからあれが13の時にボレアリス家を飛び出すまで共に育った」

私の頭はいつも許容できる範囲をこえろと、ぼんやりする。
この霞がかったアホな思考でも理解できることは一つだけ。

この話を、レグルスの口から以外で知るべきではなかった。

レグルスは、私を許すだろうか。

「さて」

偉そうな軍人らしい落ちつき払った声が降ってくる。

ベッドに私を押さえつけたままの体勢で、銀髪の男はゆったりと確認した。

「質問は以上だな？」

というか、今まで私の質問タイムだったのか。

これ以上、レグルスの過去を探るのはいくらなんでも反則すぎる。聞いてしまった情報だけでも知りすぎてしまったぐらいだ。

私はのろろと首を横にふった。

「では、今度は俺の質問に答えてもらう。……もう一度聞くぞ、お前はレグルスの女なのか？」
「違います」

宿屋のチェックインでは夫婦と偽ってはいるがレグルスと私の間に甘いものはひとカケラもない。

あるのは腐れ縁と……レグルスにとっては義務感だけだろう。隊長に頼まれたことへの。

「ではなぜレグルスの匂いがこのようにしみついている？　かなりの数の夜を共に過ごさねばこうはなるまい」

野宿では寄り添って寝てるけど。

かなりの数の夜を共に過ごしてるけど。

なんというかあれはお互い暖を取っているだけというか。いつから傍でひつついて野宿してるのか覚えてないけど、もう習慣というか。

いや、それよりも何でそんなことが分かるんだよ。犬じゃあるまいし。

レグルスの名前とか過去とかがいきなり出てきて動揺してたけど、根本的な疑問にようやくたどり着いたよ。

「……匂いでレグルスが分かるんですか？」

「当然だ。俺は『オオイヌ』だからな」

当然だとかそんな偉そうに言われなくても、さっぱり意味が分からない。

オオイヌってなんですか。犬の種類ですか。

「……犬なんですか？」

「ああ。だからこそ陛下の『宝』を毒サソリの手から奪還する任を与えられ、交易都市サディラにたどり着いた。そうしてお前を見かけて、欲しいと直感したので任務中に不謹慎だとは思ったが捕まえたのだ」

「いやいやいやいや、そこは真面目に任務こなしましょうよ！」

うつかりノリツツコミしてしまう。初対面の男なのに。

あれか、ツツコミどころが多いのはレグルスの兄弟だからなのか！？

奴も方向性は多少違うが偉そうでツツコミどころ多いんだよ！

シリウスはさも心外そうに硬質な青の瞳を見開いて、首をほんの少し傾けた。

憎らしいほどにサラサラした長い銀髪が私の頬にこぼれかかる。

「任務はもちろんこなしている。陛下の『宝』も既に奪還した」

真上から私を見降ろし続けていた瞳が逸れ、部屋の一角を指し示す。

横目に確認してみると木目も美しいテーブルの上に「これぞ宝箱！」という自己主張も甚だしい箱が鎮座していた。

うわあ、分かりやすい。

あの埋め込まれてる宝石、サファイアとエメラルドじゃないですかね。名前しか知らないけど。

装飾過多な『ザ・宝箱』に呆れていると、慌ただしくドアが叩かれた。

「シリウス様！ デイルとジルクの班が襲撃を受けました！ 毒サソリの手口と思われます！」

「かかったか。すぐ行く」

部下の切迫した声に、シリウスは訓練された軍人にふさわしい素早い所作で私の上から退いた。

……押さえつけられてないって素晴らしい。

しかし私が解放感を味わいつつ、肩と腕のしびれをほぐしているというのにシリウスは空気を読まなかった。

ガシヨン

なぜか間抜けに響く金属音と共に、一瞬で首になにかがはめられた。

いや、分かってる。

分かっちゃったから、分かりたくないんだよ！

「念のためだ。動きまわられるのは困るからな。……では行ってくる。大人しく待っている」

非常識なまでに勝手なことだけのたまつて、シリウスは寢室を出

て行った。

誰が待つか！

というかご丁寧に縛った上に、鎖付きの首輪までつけるなよ！
自分は犬だって言ったのはお前だろ！

犬は首輪をつけません。つけられる側だから！

私の心の叫びでシリウスが呪われることをひたすら祈った。

【八年振りの再会】（前書き）

戦闘シーンと流血描写があります。
苦手な方はご注意ください。

【八年振りの再会】

ひどい苛立ちを押し殺しながらレグルスは夜闇に沈んだ街を駆けまわっていた。たとえ一晩中走り続けたとしてもへばるような体力はしていないが、自分のしていることのあまりの効率の悪さに彼は舌打ちする。

人の多い酒場などで長弓を背負った焦げ茶色の髪の人を見かけなかったかと聞きまわり、ようやく得られた情報は「昼過ぎごろ的当て場で今まで誰も射抜けたことのない『毒サソリの心臓』に見事命中させた女がいた」ということだけ。しかも肝心のその女は賭け事が終わるや否や、賞金をつかんどつとと姿をくらませたという。

「……シリウスの奴なら、こんな時間食うまでもなく見つけれんのかな……くそっ！」

この国にいる異母兄ならば、造作もないことだ。いや、それよりもレグルスが忌々しいと思うのは自分の能力がとんだ『できそこない』だということだった。……彼の身に流れる血に反して。

幼い頃から慣れ親しんだ、自分に対する苛立ちの感情。

だが今は苛立ちを感じる時間さえ惜しい。

嫌な予感がするのだ。……とてつもなく嫌な感じのざらつくような予感が。

レグルスは己の経験上、嫌な予感『だけ』は外さないと確信して

いた。

（だいたい、あの時もそうだ。嫌な予感がして引き返してみれば、あの百回ぶつ殺しても足りねえぐらい忌々しいジェミニの脱走兵どもが……）

エセルを山小屋の床に押さえつけ服を裂こうとしていた男を見た瞬間、全身の血が沸騰したことを今でも覚えている。

思い出せば今もお炎を放つ怒りが、レグルスのまとう雰囲気をはびどく凶悪なものにさせた。運の悪い酔っ払いがレグルスにぶつかりそうになり、視線があっただけで「ひい」と気絶したほどである。

レグルスは勘を頼りに走っていた。

正確には「嫌な予感がはつきりと感じ取れるような方角へ」だ。

それはひどく曖昧な感覚だったけれども、情報が尽きた以上、これしか頼るものはない。

潮の匂いが濃い霧を作る船の墓場のような真夜中の波止場で、嫌な予感は確信に変わった。むっとする潮風に紛れ込む血臭と死臭。レグルスにとって長く身を置いていた空気が漂っていた。

月明かりしか照らし出すものがない船着き場は、今や血なまぐさい戦いの舞台だったのである。舞台には既に事切れた者が数人倒れ伏し、否応なく死の気配を蔓延させている。鋭い剣戟が鳴り響く中、舞台の主役として剣を振るうのは……レグルスにとっていくら月日がたとうとも見間違えるはずのない男だった。

「よりもよって、なんでお前がここにいんだよ……………シリウス」

苦々しい声は波音に吞まれて消えた。

*

*

*

シリウスの剣技は圧倒的の一言に尽きた。

まだ動いている敵は三人。

いずれも暗色の装束に身を包み、猿のようなと形容するしかない人間離れた動きを見せる。ある者は四肢を使って跳躍し、別の者は停泊した船の側面を走り、巧みにシリウスを包囲しようとする。明らかに暗殺という特殊技能に熟練した者たちの動きだった。

対するシリウスはそれを迎え撃つただけだ。

そう、それで全てが決する。

同時に、前方から、背後から、そして頭上から繰り出される刃をかわす素振りすら見せない。

ただ流れるような動きで己を中心として剣を閃かせた。

夜空を裂く青白い流星の軌跡のごとく、美しい斬撃。

しかしその美しさと対比するように、それがもたらしたものは凄惨だった。

三人の暗殺者はみな剣ごと身体を両断され、六個の『物体』に成り下がったのだ。あまりに鋭すぎる斬撃の影響なのか、一拍遅れて血しぶきが上がる。

血の花が咲く中心にいたというのにシリウスはもう場所を移していた。返り血ひとつ浴びずにまるで最初から気づいていたという顔で、レグルスに近付いてくる。

(……. どんだけ腕を上げりゃ気が済むんだよ、こいつは…….)

レグルスは齒噛みする。

8年前、レグルスがボレアリス家を飛び出した頃すでにシリウスは剣聖と呼ばれていた。たった17歳の少年が、である。

剣技においても、血に宿る特殊な力においても、人を従える能力においても何ひとつ、レグルスがシリウスに勝てると思えたものはなかった。むろんレグルスは生来の負けず嫌いだっただから四歳という年齢差を考慮していなかったという見方もあるのだが……それでも隔たりが大きすぎた。

自尊心が腐り落ちる前に息ができる場所へ逃れたいと願ったことが、サジタリアスを出る一因となっただくらいには。

先に口を開いたのはシリウスだった。
レグルスの記憶にあるのと寸分変わらない偉そうな口調の、低い声が響く。

「久しいな、愚弟。野良猫暮らしに飽いて戻って来たか」

「んなワケあるか。……それに俺が戻る場所はボレアリス家じゃねえ。あの家と俺はもう縁切れたはずだろ」

「母上はお前を気に入っているからな。養子縁組を解消したという事実はない。だからお前が嫁を連れて戻ってきて分家を増やそうが、構いはしないはずだったのだが……」

ぞわり、と首筋に違和感が走る。

存在しないタテガミが逆撫でされているような気分
にレグルスは悪態をついた。

嫌な予感の根源はこれだったのか、と。

「エセルというあの女は俺のものにする。お前の嫁だろうが何だろうが知ったことではない」

「ふざけんな」

「俺は冗談など言わない。忘れたのか？」

忘れるわけがない。この異母兄はいつだって本気で、だからこそ一番性質が悪いことをレグルスは骨身に試みて知っていた。

「……アイツを、どこへやった」

「相変わらず能力を得ることはできないままか。仮にも天の獅子の血を引くというのに、嘆かわしいことだな」

その言葉はレグルスの中でくすぶっていた炎を容易く爆発させた。シリウスにしてみれば事実を口にしたまでのこと。挑発ですらないと分かつてはいたが、レグルスの苛烈な精神には十分な起爆剤となったのだ。

「……っ、うるせえよ！」

唸るように吼えて、レグルスは剣を抜き放った。

剣を鞘走らせる勢いそのままに一瞬で間合いを詰め、下段から鋭い斬撃を繰り出す。

常人ならばあまりの速さに刃の煌めきを捉えることもできず、喉笛をかき斬られていただろうが、シリウスは最小限の動きでその一撃を受け止めた。

交錯した二つの剣が火花を散らす。

両者とも引かずそのまま鏖迫り合いとなった至近距離で、シリウスが表情も変えぬままつぶやいた。

「太刀筋はだいぶマシになったと褒めてもいい。……だが、俺には

敵わん」

「ほざいてろ。アイツに手え出す気なら今ここでぶっ殺してやる」
「俺を殺すには百年ほど修行が足りないのではないか？」

絶妙と言っしかない呼吸で斬り結んでいた刃を離し、シリウスは新たな斬撃を振るった。研ぎ澄まされた剣がレグルスの首を薙がんとする軌跡を描く。

間一髪、飛び退って事なきを得たものの、レグルスの背に冷たい汗が流れた。

金色の髪がひと房切られ、はらはらと空間に散る。

この一撃を避けられたのはパイシーズでの軍時代に隊長から鬼のような訓練を受けた賜物だろう。でなければ確実に首が落ちていた。

「剣を引け。流石にお前を殺すのは寝覚めが悪い」

「今さらそれを言うのかよ」

「俺も驚いた。殺し合いができるほどお前が腕を上げたのか、俺の心の持ち様なのか……どうにも手加減が上手くできないようだ」

「とことんム力つく野郎だな……」

悪態をつきつつもレグルスは攻めあぐねていた。

シリウスに隙はない。そしてシリウスに打ち勝つ可能性を見出すこともできなかったからだ。

鮮やかな緑の瞳で異母兄をにらみつけていると、レグルスの耳は近づいてくる足音を拾った。剣を構えたまま、横目に確認すれば駆けてきたのは6人ほどの男たちだ。町人の服を着てはいるが、雰囲気からして訓練された軍人と分かる。

「シリウス様！ その男は……？」

「手出しは無用。これは俺の愚弟だ。……それよりも負傷者の安否を報告しろ」

シリウスの言葉に驚きの声をもらしていた部下たちだったが、それでも背筋を伸ばし声を張り上げる。

「ご命令通り負傷者の救護は完了いたしました！ 重傷者3名。残りの6名は命に別状はないとのことですよ！」

「そうか……。では下がれ。毒サソリの始末は完了した」
「ですが……………」

「下がれと言っている」

部下たちの困惑にもシリウスは頓着しない。

冷静な顔でレグルスと対峙していたのだが、次の瞬間、突然眉をひそめた。

風の匂いを嗅ぐように首を巡らせると、街の方へ顔を向ける。

「……神器が、開いたのか？ 陛下の『宝』の匂いが……………」

シリウスの行動は迅速だった。

あっさりと剣を鞘に納めると街へ向かって駆けだしたのだ。

まるで部下への指示を出す間も惜しいという急ぎぶりに、誰もが啞然とした。

その状態からいち早く我に返ったのはレグルスである。

「ってオイ！ どこまで勝手なんだお前は！ つーかエセルをどこにやった！」

本気で嫌なことに異母兄の傍若無人っぷりに磨きがかかっていることを確信しつつ、レグルスはその背を追いかけて走りだした。

王様のお宝

故郷を追い出される時にお偉い大神官サマから授かりました知識に『念話』に関するものがあつた。

どうも離れた場所にいる二人が脳内会話できるらしい。

ジェミニの双子の王族に使い手が多く、私が殺した兄王ザムエルは念話で弟王テオドルに「俺殺したのこの女だから呪ってくれ」的なことを言つた、らしい。

それでテオドルが私を呪つた、らしい。
なんで全部『らしい』なのかと言つたら、王族の力なんぞ話半分も信じちゃいないからだ。

呪われてから1年近く……いや、まだか？

ザムエル射殺したのが夏で、今がぐるっと季節が巡って暑くなりかけてる時期だから。

まあでも、sonだけ呪われてからたつてるけどピンピンしてるからな！

健康体そのものだからな！

……話が逸れた。

念話。念話について考えてたんだ。

信じちゃいないが、念話って使えたらすごく便利だと思う。

もしもし、レグルス。

突然ですが今なにをしていますか？

私は君のお兄さんに両手両足縛られた上に金属製の首輪はめられて鎖でつながれてます。

見事に拉致監禁されてます。

あんな迷惑な兄がこの国にいるのなら、教えておいてください。

……教えられても回避しようがなかった気がするけれども。

レグルス。私の予想では今、夜の街ナンバーワンの肉感系美女に言い寄られているところに宿屋の自称看板娘が出張って来た修羅場にいるんじゃないかな？

修羅場が終わったらでいいので探しに来てください。

……嘘です、できるだけ早急に助けにきて欲しいですごめんなさい。

だって君の兄、話が通じなさすぎる！ なにあのフリーダムな人！

自称犬系シリウスに関する苦情をレグルスに思念で飛ばそうとして唸っていると、コトトンツという音が背後で上がった。

うわ？ なにごとですか？

ドアに向いて横になっていた体勢をぐるっと変えて、音の出所を探る。

ベッド上での芋虫動きだがな！ 弓使いの背筋で無駄に素早いよ！

音の出所は……あれだ、『ザ・宝箱』。

シリウスが奪還したという王様のお宝が入っているという宝石こてこてデコレーションな箱だ。

それがコトツコトコトコトツと動いている。

……小動物でも入ってんのかな？

とか思ったら、か細い声が聞こえてきた。

「……………ふえ……………まっくらだよ……………怖いよう……………どこどこお？
……………助けてよう……………」

しゃっくりあげながらの、女の子の声。

あの箱に入れる大きさということは……………幼女か！

王様のお宝は幼女だったのか！

サジタリアス国王がロリコンだったとは知らなかった……………という
かそんな噂が出た時点で国として終わってるが。

そしてシリウスの鬼畜疑惑が濃くなった。

女の子を箱に詰めるなど言語道断！

「大丈夫。落ちついて聞いて、君が今いるのは箱の中なんだよ」

怒りはとりあえず脇に置いて、君が今いるのは箱の中なんだから
優しい声を出す。

そうすると箱の動きはピタツと止まった。

代わりに、すぐる様な可愛い声が返ってくる。

「そこに誰かいらっしやるんですか！？ お願いしますここから出
してください！ わたし暗いところダメなんですううう！」

幼い女の子にしてはずいぶんとしつかりした口調だ。

宝箱の大きさは私が両腕で抱えられる程度で、せいぜい5歳以下
の子どもしか入りそうにないのだが……………。

まあ今それは重要なことじゃない。

「ええと……そうしたいのは山々なんだけど今の私には不可能で……。ごめん！」

後ろ手に縛られていることよりも、鎖の方が致命的だ。
なんせこの無駄に豪華なベッドから降りられないくらいの短さなのだ。

部屋の隅に置かれたテーブル上にある宝箱には、足が10倍ぐらいにゆーんと伸びないと届きもしないだろう。

「ふええ、そんなあー」

「いやいやいや、まだ希望はある！ たぶん！ とりあえず落ち着いて、上の蓋が開かないか押し上げてみて」

希望その1、シリウスが鍵をかけ忘れたことを祈る。

オーソドックスな半円型の蓋がかすかに震える。
しかし、それだけだった。

「開きません！」

ちいっ！ やっぱきちんと鍵かけてやがったか……。

わずかに蓋が作る隙間があるとはいえ、密閉気味の容器に女の子
いれて鍵かけるなよ！

窒息したらどうする！

シリウスを今度から鬼畜と呼ぼうと胸に刻みつつ、声を張り上げる。

「そついう見た目重視の宝箱って蝶つがいの作りとかちゃっちいとが多いから、蓋押し上げて踏ん張ってみて！」

希望その2、宝箱が壊れることを期待する。

ああいう宝石のついた、それ自体が美術品みたいな宝箱が頑丈だとは思えない。

「ふえ……無理です……開きそうにないです……」

「むしろ叩き壊すくらいの勢いで力いれて！……いや、蹴り壊す方がいいか」

腕の力よりも、足の力の方が何倍も強いものだ。

「箱の中で見動き取れるなら、背中を下にして足で蓋蹴り上げて！思いつきり！イメージとしては……」

なんだ？

なんか足の強い動物っていたっけ？

小さい女の子でも分かりやすいような。

その時、唐突に頭に浮かんだのは弓を持ち始めた頃のこと。

獵師の父さんについて山に分け入り、急斜面を駆けのぼるウサギにまんまと逃げられた幼き日のしょっぱい思い出。

「イメージとしてはウサギキックで！」

愛くるしい外見に反して、奴らの脚力は強い。

「……う、ウサギ……ですか？」

「大丈夫！ウサギなら開けられる！なぜなら逃げ足だけで生存競争に生き残ってる種族だから！」

「そ、そうなんですか……ウサギなら開けられるんですね！　ウサギなら！」

良かった。なんだか思い込みが強そうな子だ。

こういうイメージは100パーセント以上の力を出すために必要なのだ。

国にいた頃、隊長がよく言っていたが「人間、火事場になれば馬鹿力が出るものなんだよ」である。つまり自分はこういう者だという意識がなくなれば、怪力が発揮できたりするかもしれないということ。

それを引き合いに出しての隊長の訓練は……手足に震えがきたので割愛。

隊長は、大好きでしたが、鬼でした。

昔を思い出してちょっと遠い目になっていると、宝箱からぶつぶつと声がもれてくる。

「だいじょぶだいじょぶ……ウサギなら開けられるウサギなら開けられる、わたしなら開けられる……！」

ダムツと蓋を蹴りつける音がした。

その次の瞬間、宝箱がいきなり光り出したのだ。

青白い輝きが宝箱からあふれ出たかと思うと、宝石がばらばらに明滅し、やがて光は消えた。

ランプの光とは質が違う、星の光に似た鋭さのある輝きだった。

「な、なに今の……？」

光は、という言葉呑みこむ。
あんまりにも呆気なく、パカッと蓋が開いたからだ。

そうして宝箱から文字通り飛び出てきたのは……………ウサギでした。

「ありがとうございますうう！ おかげさまで出られましたっ！」
ぴょんぴょん、と飛び跳ねてベッドの上にやってきた生物を
まじまじと見つめてしまう。

……………やっぱりウサギにしか見えなかった。

*

*

*

ふわふわの毛並みは淡い茶色。
ミルクティー色のおまやかな色合いだ。
お腹は白いもふもふした毛に被われていて、実に柔らかそう。
真っ黒なお目目は黒曜石のごとくきらきら輝いていて愛くるしく
私を見つめていますよ。

王様のお宝は、ウサギでした。

というかウサギってしゃべれたのか。

なんてこった！

ごめんなさい、今まで普通に食べてました。

むしろ鳥肉の次にウサギ肉食べてます。獲りやすいから！

「……ええっと……えーと、はじめまして？」

「はじめまして！」

混乱しつつ、とりあえず挨拶から始めてみた。

元気なお返事と共に目の前のウサギの口が動く。

お父さん、お母さん、そして隊長。

びっくりです。ウサギさんと会話が成立しております。

「わたしはミーファと申します！ よろしく願いします！」

「えー、あー……こちらこそよろしく願いします？ 私の名前はエセルです」

「エセルさんですか！ 響きが綺麗なお名前ですね！ わたしの名前は祖母が思いつきでつけたものらしいのですが……」

「えっと、ごめんミーファ。君のおばあさんもウサギなのかな？」

なんで君ウサギなのにしゃべるの？ とは聞けなかったよ。

いや、これも直球な気はするけどね！

ごめん混乱してる！

私の言葉にうす茶色のウサギ……もといミーファはハツとした顔をした。

……ウサギのハツとした顔って、狩人の匂いを感じ取った時の顔だよな！。

野山を駆け回っているウサギと見れば見るほど同じである。

しゃべることを除けば！

「これはすみません！ よく考えてみればエセルさんが驚きになるのもご無理はなく……なにとぞご容赦を！」

「え……いや別に私も悪かったし……」

なにが悪かったのか自分でも良く分からないが、ペコペコ頭を下げてくるミーファにこちらも頭を下げる。

縛られてるから、首動かすだけです。

その様子にミーファが大きなお目目をさらに見開いた。

長いお耳をぴるぴるさせて、綿菓子みたいな身体を私にぶつけてくる。

「ああああ！ ごめんなさい！ まずは縄を！ 縄をお取りするべきでしたね！ 少々お待ちを！ ただちに齧り切りますので！」

まずは背中にまわって手の戒めを取り（カリカリ齧って）、次に足も解放してくれた（カリカリ齧って）。

すごいね！ ウサギの前歯！

丈夫な縄もすぐさま齧り切れたよ。

「ふうう！ 終わりました！」

「真面目にありがとう。いやー、シリウスっていう鬼畜な軍人に縛られてさ……あ、やべ腕しびれてら」

首輪はまだついているものの、手足が自由になった解放感はいり知らない。

しびれた腕をまわしていると、ウサギ……いやミーファがぶるぶる震えだした。

「し……シリウス様がお縛りになられたのですか……？」

狩られる寸前のウサギと同じ顔、つまりは恐怖にかられたミーフアの様子に尋常ではないものを感じ取る。

「……君もシリウスにはひどい目にあったっばいね。箱詰めなんて全く鬼畜な……」

「ああああああああ！ どうしましょう！ もしや、縄は……あの、その……そそそ、『そういう』恋人同士のお戯れだったので……！ わたししたら、また早とちりで余計なことをしてしまったのではああああ！」

なにこの思い込みの激しい小動物。
激しく誤解なんです。

ベッドの上で震えながらぴょんぴょん跳ねるミーフアを、私は死んだ魚の目で見つめてしまった。

ウサギの身の上話&血まみれダガー

「ではエセルさんはシリウス様にいきなり拉致されたとおっしゃるのですね！」

「あれを拉致と言わないなら、何を拉致というのか分からないよ」

ミーファの恐ろしすぎる誤解を解消するために、なんかもう疲れた私はひどく投げやりな調子で言葉を放った。なんで縄で縛られたと言ったら、特殊なプレイをする恋人関係にあると思われるのかが分からない。

あれか、ミーファの中ではシリウスは恋人をまず縛る男として記憶されているのか。

ミーファはなぜだかひどく考え込んでいたが、突然ポンと手を打った。

……ウサギの身で手を打てるってすごい器用なんじゃなかるうか。

「それは俗に言う一目惚れというやつではありませんか！」

「ごめん。なんでそうなる」

「シリウス様が鎖をつけるほど執着されているのならば、エセルさんに対して本気だと考えるべきだと思いますよ。だって宮廷の女性陣からものすごいアプローチを受けているのにことごとく冷たい視線ではね返し、今のところ特定の恋人はいらっしゃらないようです。なによりも、陛下のご命令以外には何に対しても興味を持たれないようなシリウス様が捕まえてくるなんて、これはもう恋という他ありません！」

興奮しているらしいミーファが膝の上に乗って来た。

もふもふした丸い生き物の重みは正直言って心地いいが、キラキ

うお目目にはげんなりする。

なんだろう、この魂を吸い取られていくような疲労感。
訂正しようと思ったら、ひどく力のない声が出ってしまった。

「捕まえたんじゃない、拉致ね。拉致」

「それでもすごいですよ！　だってあの方は興味がないものは無視するか斬り捨てて終わり、という御仁ですから！」

「……それ人として問題あるんじゃない……」

「ですがそれを補って余りあるほど有能で、剣の腕は国一番。陛下もそれは信頼していらっしゃるんですよ！」

国王陛下のことをよく知っているという口ぶりに、信じがたい事態の連続で麻痺していた思考回路が動き始めた。

「ところで……ミーフアはいつたい何者なのかな……？」

ウサギでしゃべって、王様の宝。

……知らない方が良さそうな気もしてきた。

「わたしですか！　わたしは陛下の側室です」

可愛らしい声が告げた衝撃の事実、私はベッドに突っ伏したくなかった。

国王陛下の側室。

この膝の上に乗っている、ふわふわのウサギが。
いったい何がどうなっているんだ、サジタリアスという国は。

「……………国王陛下ってウサギ好きなの？」

ようやく出た質問がこれだよ。

さつきからサジタリアス国王のイメージが二転三転してきてるんだが、そのどれもがまともな人物像を結ばない。

「いえ、ウサギはお嫌いだそうです。お小さい頃、膝の上に抱っこしたら粗相をされてしまったことがあるらしく……私もこの姿にはあまりなるなと言われております！」

「……この姿？」

「はい、わたし普段はちゃんと人間をしておりますから！ ただ大量の血を見たり、びつくりするとウサギになつてしまう体質でして……。殿方にキスをしていただくと元に戻るのです。なにやら滅びた国の王族の血が混じっているらしいのですが、よく分かりません！」

王族の血、か。

それは現実に力を持つものなのか。

私としては王族の不可思議な力が本当だとは信じたくないのだけれども。

だってジェミニの王族に呪われてるから。

しかし、しゃべるウサギが膝の上にいるというのは事実だ。

ウサギに変化できる王族の国があったなんて知りもしなかったけど、レグルスはなにか知っているかもしれない。

ミーファの愛らしい兎唇がむぐむぐと身の上話を語り始める。

「わたしは祖母と二人で暮らしていたのですが、祖母が亡くなった後、村にやってきた奴隷商人さんに売られてしまいました……。村の皆さんはわたしがウサギになることもほのぼのと見守ってくださいる良い方ばかりだったのですが、借金に困って出戻ってきた村長さんの息子さんが……。その、わたしを売り飛ばしたそうです。」

そして奴隷市場を一網打尽にしたシリウス様に助けていただいて、

失われた王族の血がどうのこうのということで、陛下と出会ったわけです。

最初はウサギということで嫌われておりましたが、色々ありました。今では『お前だったら例えウサギ姿でも一瞬キスするぐらいはしてやる』とおっしゃってくださるまでになりました！」

「その色々あつての内訳が激しく気になるんだけど……」

なにせウサギ嫌いを克服してまで愛が芽生えたのだ。いったい何があった。

「王様の側室がなんでこんな所にいるの？ 王宮にいようよ」

「もつともです……陛下のお傍を離れてしまいました。陛下、不眠症気味でいらっしゃるのに……ああ、大丈夫でしょうか」

心配そうに溜息をつくミーフア。

ウサギから人間に戻ったら、なかなかの美少女なのだろう。ウサギ姿でも可愛いが。

「側室になつてからお作法にダンスと忙しい日々だったのですが、アンに眠り薬を嗅がされてさらわれてしまいました……。あ、アンというのはスコルピオンの暗殺者さんです。とても気さくなのですが、とてもとてもとても怖い方です。笑顔で血の海を作るのが趣味だそうで……わたしはウサギになつてしまいました」

そういえばシリウスもスコルピオンやら毒サソリがどうのこうのと言っていた。

スコルピオンもリーオーと同じく南大陸の大国。

中央海に散らばる島々との貿易権をめぐり、海をはさんでにらみ合うサジタリアスとは陰悪で有名だ。

サジタリアス
スコルピオン
射手の弓は常に大サソリに向かって構えられていると言われている

る。

双魚と双子バイシース ジュエミニの関係と似たようなものなのだろう。

つらつらと考えていると、勢いよくドアが開いた。

駆け込んで来たのは銀色の長い尻尾……じゃない一つに結んだ長い髪をなびかせたシリウスだ。

……どこまで間抜けなんだろう、私。

ミーファの身の上話に聞き入って、逃走についての思考を放棄してたよ。

「無事か」

私の顔を見た瞬間、どことなくほっとしたような顔をしたシリウスが意外だ。

崩れることなどないような怜悧な美貌に、ほつれた髪が少しかかっている。

急いで戻って来たのだろうか。

ベッドの傍まで来ると、シリウスは私の膝上のミーファに恭しく礼を取った。

「ご無礼をお許し下さい、ミーファ様。気絶していた貴女を神器に閉じ込めましたのは、ゆえあつてのことでした」

「謝らないで下さいシリウス様。なんとなく理由があるんだろうなあ……と思っていましたから！」

「ありがとうございます。ところで、ご自分で神器を開けられたのですか？」

「はい！ エセルさんの励ましでなんだか力が湧いてきて、ドカンと！」

「そうですね……では私よりもミーファ様の力の方が上ということ

ですね。陛下のためにも非常に喜ばしいことではありますが……今は少々まずい事態が発生しました」

そう言いながら、手際良く私にはめた首環を外す。

シリウスが襟元から鍵を取り出した時は、後生大事に首から下げたのかとツツコミを入れたくなったが我慢した。空気を読んで我慢した。

「端的に言いますと、神器で封じていたミーファ様の気配がもれ、この場所を暗殺者に嗅ぎつけられた可能性が高いのです。毒サソリどもは皆、畏にかかったと判断していたのですが……嫌な予感もしましたので。この場は放棄し、安全な場所に移ります」

だから私を解放したのか。

これはドサクサに紛れて逃げるチャンス。

……そう思えたのは本当に一瞬だった。

「いやだなあ、ヒトを犬みたいに。犬なのはアンタだけだろー」

場違いを突き抜けるほど明るい声が響いたのだ。

目を向ければ、誰もいなかったはずの壁際に一人の少年の姿。

赤褐色の髪を一本の太い三つ編みにして、だぼついた黒の衣をまとった不思議な風体をしている。

彼を見てミーファが声をあげた。

「アン!？」

「おこんばんはー。気がつけば、アナタの背後に、そつといる。お茶目な暗殺者アンタレスでっす」

ウインクをした少年は道化じみた口調に似合わないことに……鮮

血が滴り落ちるダガーを手にしていた。

毒サソリの少年

アンタレスと名乗った少年を目にした瞬間、ぞわりと全身が総毛立った。

弓以外はてんでダメでも私も元軍人だ。

ヤバい状況……命の危機というものの空気ぐらい瞬時に感じ取れる。

この少年はヤバい。

琥珀色の目は楽しげに細められ、だるだるした体勢のままなのにまとう雰囲気やヤバい。

血にまみれたダガーを見るまでもなく、毒のある生き物特有のオラに気圧されそうだ。

本능が私に告げる。

不用意に動くなと。

動いたが最後、致命的な何かが即座に飛んで来るだろう。

愛用の弓が手元にないことが心もとなさに拍車をかける。

たとえ室内で役に立たないと分かっても、戦場に出る時はいつも共にあった弓だ。

こんなきつつい殺氣が飛び交う場面にないと裸で猛獣の前にいるような気分になる。

くそう、シリウスめ。私の弓をどこへやった！

緊迫した空気を裂いたのは、どんな場面でも涼やかなシリウスの声。

「相変わらず匂いを隠すことだけは上手いな、赤毛」

「どーもー。犬さんに気付かれないって、オレってば優秀っしょー？ まーでも、探知能力じゃアンタの勝ちかな。オレ、アンタの気配たどれなかったし。いや男の気配なんてたどりたくもねーけどー。ミーファちゃんみーつけ、って来たらアンタもう戻ってるし」

「そうか、なら諦める。陛下の宝であるミーファ様を連れ去ろうなどという、愚かなことを考えるな」

その言葉を聞いてアンタレスは決まり悪そうに頭をかいた。
背に垂らした一本三つ編みが左右に揺れる。

……そういや貴族でもないのに髪を伸ばしてるのは何故だ。

「あーごめん。ミーファちゃん。それについて一個残念なお知らせがあるんだわ」

「ふえっ！ な、なんですか？」

「俺の親分……スコルピオンの王様からの命令でさー。さらってくるの無理っぽいなら、殺してこいってお達しなんだよねー。ほら、うちの大親分、サジタリアスの王様に嫌がらせすんのが趣味な人だし？ 『奴に初めてできた愛する女を奪ってやるのも面白いが、殺すのもまた一興』って言うててねー」

そんなハタ迷惑な話をにこにこ笑いながらするな。頼むから。

というか一国の国王が嫌がらせで暗殺者派遣すんな。

「つーわけでー、オレとしては残念なんだけどミーファちゃん殺すことになったから」

「させるわけがなからう」

確固たる宣言と共に、シリウスが疾風のごとく走る。

流れるような動きで剣を抜き放ち、アンタレスの喉首に白刃を閃

かせた。

速いっ！

太刀筋が銀色の残像としてしか捉えられない。けれどその神がかった斬撃を赤毛の少年はダガーで受け止めた。

いや、違う。いなした。

シリウスの神速にして重さのある剣とまともに打ち合うことはせず、上段から斬り結んで、身体を跳ねさせたのだ。

アンタレスの動きはまるで曲芸師のようだった。

触れ合った剣の威力を利用してコマのようにくるくると回り、ダン、と天井を蹴りつける。

全身のバネを利用し、目にも止まらぬ速さでシリウスの背後にまわり、投げナイフを繰り出す。

そのトリッキーな動きに隊長の言葉を思い出した。

『暗殺者っていうのは室内戦闘の熟練者だよ。レグルス、もし君が暗殺者と対峙することになったら、室内でやり合うことは避けるべきだね』

あれはいつだっただろうか。

なぜだかレグルスに向かってこんこんと諭していた隊長を偶然見かけたのだ。

レグルスはいつも通り、ふてくされたような顔で「うるせえ」などと言っていたと記憶している。

広めの寝室はいえ、この場も立派に室内だ。

シリウスの強さは今まで私が見た剣士の中でも飛び抜けているけども、アンタレスの体さばきとスピードは尋常じゃない。

どちらが優勢とも言えない苛烈な応酬から、目が離せなかった。

しかし弓使いとして鍛えた視力のおかげだろう。

視界の端でうごめいた『何か』に私の身体が反応した。

うわ、なんだろう。ものすごく嫌なものを見た気がする。

頭で考える暇などない。

反射的につかんだ枕で、ベッドにはい上がってきていた『それ』を振り払う。

絨毯にぼとりと落下した『それ』に、全身の毛穴から汗が噴き出した。

……うつつ、実物は初めてみるけど想像以上にグロテスクだ。

太い尾を持つ、禍々しく黒いサソリだった。

仰向けに落下したサソリの、うぞうぞとうごめく脚に吐き気がこみ上げる。

「おねーさん、良い勘してるねー」

ひゅうつつ、と口笛を吹き、楽しげにアンタレスが叫ぶ。

軽口を叩きながらもダガーと投げナイフの連続攻撃は途切れることなく、金属同士がぶつかり合う高い音を響かせている。

そのため、こちらに一瞬気を取られたシリウスはわずかに体勢を崩した。

アンタレスは無邪気とも言えるほどあっけらかんと笑っている。

「気づかない内に殺してあげようって思ってたんだぜー？ そいつ一番毒強いクロちゃんって種類だから、刺されたら一瞬であの世だったのに」

純粹に好意でそう思っていたという口調。

あーあ、と嘆く声を心底恐ろしいと思った。

「これでちょっと怖がらせて殺すことになった。ごめんなー、ミーファちゃんと見知らぬおねーさん」

その後にアンタレスが口にした言葉は私には理解不能な言葉だった。

……古代語だろうか？

北大陸も南大陸も、主要な国々はみな統一言語を使っていて、国によって訛りはあるものの意味が分からないということはないのに。

『我が血において命ず。現出せよ、千の黒蠍』

その声に呼応するように、グジャリグジャリと、なんとも不気味な音が響く。

目をやれば、壁にいつのまにかあった赤黒い染みからサソリが大量にはい出てくる音だという信じたくない事実を、理解せざるを得なかった。

ちよっ！　なんだその反則技は！

暗殺者にそんな不可思議な技が使えるだなんて聞いてないよ！

「はい。これがオレのしょぼーい能力。ホントは親分みたいにかっけー大サソリになりたいんだけどね。できなくてさー。そんな代わり自分のそばにサソリちゃん召喚できんの」

おしゃべりの間にも攻防は止まってはいない。
何度目か分からない斬撃をシリウスが繰り出し、長剣とダガが
火花を散らす。

「随分と余裕だな。説明などするとは」
「えーだつてオレ、ミーファちゃん好きだし。会ったばかりで
そこのおねーさんともお知り合いになりたかったし？　もう残念で
残念で……」

ダガーがものすごい音を立てて、シリウスの剣をはじいた。
腕力の差を考えてだろう、始めはまともに斬り結ぶことさえ避け
ていたというのに。

まさか……腕力が上がっている？

「あと、ちょっとラリってるからさー。ドーピングしてんの。アン
タと互角にやるためにねッ！」

速さも力も増してきているアンタレスの相手で、シリウスはこち
らを助ける余裕などない。
いやそれどころか、黒光りするサソリの群れにも対処しなくては
ならず一気に劣勢に立たされたと言えるだろう。

じょじょに床は黒サソリに埋め尽くされ、その大部分は意志を持
つてミーファに向かって来ていた。

たかが毒虫と侮ることなどできない。
動きは素早く、時には跳ねてベッドに飛びついて来るのだ。
毒針尻尾をくねらせつつのジャンプをかましてくるサソリが、無
数にうじゃうじゃ。

うつつ、気持ち悪い。サソリに刺されて死ぬなんて真っ平ごめん

だ！

腕の中で震えているミーファをしっかりと抱え直す。

声をかけてあげたいけどもアンタレスの注意を引くのはまずいため、やめておいた方が賢明だろう。

アンタレスがこちらに背を向けた瞬間を見計らって、ミーファを抱き抱えたまま窓際まで走った。

とにかく逃げなくてはならない。

確実に迫ってくる毒サソリの群れから。

バルコニーへ続く大型窓を開け放った瞬間、心臓がドクリと悲鳴をあげた。

ひたすらに軽い口調の死刑宣告が背後から投げつけられたからだ。

「はい、逃げちゃダメー」

殺気の塊と共に、投げナイフが空を切る音がした。

暗殺者のナイフだ。おそらくは猛毒が塗ってある。

アンタレスの攻撃を回避するシリウスが慎重だったのも、おそらくはそのせい。

背に向かって飛んでくるナイフがどこかに刺されば、一巻の終わり。

避けないと。なんとかして避けなければ。

でも、もう遅いと心臓が跳ねた瞬間にどこかで諦めていた。

戦争中にいつも思っていたことだ。

命の幕切れは蠟燭の炎を吹き消すように、あっさりと訪れる。

大仰な前振りなんて存在しない。死は当たり前のような顔をして突然やってくるのだ。

隊長と両親と、そしてレグルスの顔が頭をよぎる。

ごめんなさい。

どうやら私はここまでのようです。

レグルスには、随分前から伝えたかったことがあったけれど。

ずぶり、と。

投げナイフが肉に突き刺さる、にぶい音が耳朵を打つ。

覚悟していた痛みは

ない。

なんでだろう。

思わずつぶっていた目を開くと、私をかばうように腕に抱いている誰かと視線が合った。

「くそ、やっと見つけたと思ったら……。なにやってんだ、馬鹿エセル」

鮮やかな緑の瞳が、忌々しげに私をにらんでいる。

見慣れた不機嫌顔なのに、眉のしかめ方がいつもとは違った。

まるで、痛みをこらえるかのような。

「レゲルス」

名を呼んだ声は私のものではないように、ひどく震えていた。

君の手が頬に触れて

ドクドクと、鼓膜を突き破るように心臓の音がした。

なんで、レグルスがここにいるのか分からない。

頭はレグルスの背に何が刺さっているのか考えるのを拒んで、熱をはらんで沸騰するかのよう^にに痛んだ。

そうして煮えたぎった思考から吹きこぼれた記憶が、どっと私に押し寄せてくる。

戦場ではすぐ隣にいた仲間が倒れる瞬間を幾度も見てきた。

深手を負い、命が消えていく仲間の手を握っていたこともある。

血と土煙に沈んだ世界で生き延びるには、私たちの命はもろすぎて手のひらから砂のようにこぼれていってしまう。

そしてこぼれ落ちた砂を取り戻す術^{すべ}はないのだ。

私はいつだって、自分はいつ死んでもおかしくはないと分かっていた。

弓の腕前以外に取り柄のない、非力な兵士。

しかも女の身。

いつ終わるともしれない戦争の中で、私もいつかこぼれた砂の一粒となるのだろうと、漠然と思っていた。

けれどどんな激戦が続く日々の中でも、レグルスが死ぬなんてことは不思議なくらいに頭に浮かばなかったのだ。

自分が死ぬところは想像がついてもレグルスが倒れるなんて夢にも思わず、戦場を駆け抜け抜け血まみれになっても光を失わない彼がただただ眩しかった。

国を追放されてから、レグルスと二人、旅をした。
穏やかとは言えないけれど、戦とは無縁の日々で
は忘れてしまっていたのだ。

私

命の終焉はあっさりと、唐突にやってくることは覚えていた。

しかし『どんなに強い人間にも例外なく』死は訪れるという事実
は
意図的に忘却の彼方へ押しやっていたことに気づく。

西日の中を黒い土煙がもうもうと舞っていた、あの戦場。

隊長が斬り捨てられ、地に倒れ伏した光景がまざまざと蘇った。

私はまた、失うのだろうか。

嫌だ！

あの戦場からずっと麻痺していた魂が血を噴き出すように全ての
感覚を取り戻し、叫ぶ。

嫌だ嫌だ嫌だっ！ 怖い、怖いよ……。

レグルスを失うかもしれないと考えただけで、心臓を切り刻まれ
るような痛みが走る。

息をすることさえ辛い。

耐えられない痛みの中に一人取り残されるくらいならば、本当に
心臓が止まったらどんなにかいいだろう。

ふいに熱い手のひらが私の小刻みに震える頬に触れた。
輪郭を確かめるようになぞる指先に悪夢を拭^{ぬぐ}ってもらったように

急に息をするのが楽になり、今まで微動だにできなかったことを自覚する。

「怪我はねえな。……下がってる」

痛みを耐えるように眉をしかめていても、生命力に溢れた瞳は少しも損なわれていなかった。

形の良い口元には、不敵な笑み。
狩りに出る前の猛獣の笑みだ。

レグルスは言うやいなや、俊敏に身をひるがえし銀色の何かを投げ放った。

視界によぎった血の滴に、それが彼の背に刺さっていたナイフだと知る。

鋭い音を立てて飛んだナイフは、こちらに迫っていたアンタレスへの牽制だった。

ダガーを振りかぶり跳躍してきたアンタレスが空中で身をひねる。ナイフを紙一重で避けた暗殺者の少年は琥珀色の目を嫌そうに睨めた。

「あつぶねー。つか、見知らぬおにーさん、アンタ何で死なねーわけ？ ナイフに仕込んであんのは象でも一瞬で殺せるってえ貴重な毒なんだけど？」

「は、毒なんざ俺にや利かねえよ」

「マジでか。……オイオイ勘弁してくれよ。チートなのはその銀髪犬だけで十分だっつーの」

部屋の奥に目をやれば、群がる黒サソリに舞うような剣技で対処しているシリウスの姿。もはや押し寄せる雲霞のごときサソリの大

群を剣さばきだけで駆逐していくのは、ある意味恐ろしい芸当だ。
シリウスの相手を、十分な数出現したサソリにまかせ、アンタレスは目的を達成すべくこちらに来たのだろう。

そもそもの目的。

即ち私に抱っこされているミーフアを殺すために。

腕の中にいるふわふわした生き物の温もりを守らなければと思うのに、竦んでしまった足は思うようには動かず、私はただ戦いを見つめていた。

ランプの明かりにも煌めく金色の髪をなびかせ、レグルスが駆ける。

獲物に食らいつく獅子のごとく、猛然とアンタレスめがけて剣を振るう。

剣線は技巧を尽くしたのではなく、ただひたすらに真っ直ぐだった。

その分、ひどくシンプルで速さと力強さを秘めた一撃。
足元にうごめく毒サソリを蹴散らし、危険なはずの毒虫にも頓着しない。

一切の迷いのない、決然とした剣が一閃する。

ギイインッ！

激烈な音が響く。

レグルスの剣は禍々しいダガーと斬り結び火花を散らして
そのままダガーごとアンタレスの体を吹っ飛ばしていた。

少年の体が壁に叩きつけられ、ずるりと床に落ちる。

すぐに立ちあがったもののアンタレスの手にダガーはなく、部屋

の中央に転がっていたそれをレグルスは数匹の黒サソリごと隅へ蹴り飛ばした。それから長い足に這い上ってきていたサソリを面倒くさそうに振り払い、アンタレスに向かって剣を構える。

「一つ聞く。てめえの親父はやたら色が白くて目が紅くて、蛇を首に巻いてる男か？」

「……つく……ははっ、いきなり何？ オレ親の顔なんて知らないけど？」

「自分がなんで王族の力を使えんのか、疑問に思ったことはねえのか？」

「スコルピオンの後宮はすげー規模だかね。王族の血を引いた人間がわらわらいても不思議じゃないっしょ。たまたま血を受け継いでいて、力を持つてるのが暗殺者のオレだったってだけだろ？」

「条件が重ならねえ限り、いくら血を受け継いでても力は使えねえよ。血を継いでるだけでいいなら力を使える奴がもつと大勢いるはずだ」

「……悠長だねー、見知らぬおにーさん。言つとくけど、アンタがオレに勝てたのは運だよ。単にクスリの効果が切れる時間がちょうどさっきだったってだけ。……今オレを殺さなかったこと、アンタきつと後悔するよ」

呪いのような言葉とは裏腹にあっけらかんとした笑みを浮かべて、アンタレスは何事かを呟いた。

その小声は聞き慣れない響きで……黒サソリを召喚する時の韻律に似ている。

刹那、床にできていた血の染みにぐぷりとアンタレスの体が沈みこむ。

そう思った次の瞬間には、少年の体は部屋から消えていた。

もはや妙なことが起こりすぎていて驚けないが、不可思議なことは連続して起こった。

乾いた音を立てて、あれほどいた黒サソリが全て砕け散ったのだ。あとにはただ、赤黒い砂のようなものが残っているだけ。

「レグルス！」

こんなに必死に叫んだのはいつ振りだっただろう。めったに出さない大声に喉の奥がひりついて、急いで駆け寄ったことで痛みは更にひどくなった。

「傷を、手当しないと……」

上着にまで血が滲^{にじ}んでいる背から視線がそらせない。手を伸ばそうとした瞬間に、気を利かせてくれたミーファがぴよんと跳ねて腕からすり抜けていった。

「そんな今にも死にそうな顔すんな。これぐらいの傷なんともねえよ」

「でも毒は？ 毒が塗ってあったってアンタレスが言ったはず……」

その言葉になぜかレグルスの眉間の皺が深くなった。

「アンタレス？」

「さっきの暗殺者の名前。軽い調子で自己紹介してた」

「…………… っち、予想通りかよ。あんのクソ親父ほんとうに迷惑だな」

忌々しく吐き捨てた言葉の意味がよく分からない。

けどそんなことよりも私はこれ以上レグルスの体から血がこぼれ落ちるのを止めたくて、強引に背中^はにまわった。

「とにかく止血しないと。毒の心配がないなら尚更すぐにでも」

「あ、ちょ。おい、服を剥^はごうとするな！」

「上着脱いで。手当ができない」

もどかしくてシャツの襟元に手をかけると、なぜか顔を赤らめたレグルスがそれを止めようとする。

あせった調子で私の手首をつかみ、そこに視線を這わせた瞬間、彼の柳眉が跳ねた。

「……………これは？」

私の手首は縛られていた名残が、くつきりと紅くなっていた。

「いや今はどうでもいいし。それよりも止血」

「……………どうしても良くねえよ」

恐ろしく不機嫌な声が降って来たかと思うと、その声を紡いだ唇^{くちびる}が私の手首に近付いてきて……………

「離れろ、愚弟」

凍てついた夜よりもなお冷然としたシリウスの言葉と共に、殺気がぶつかって来る。

強烈な殺気から隠すように背に庇われてレグルスの血の匂いを間近に嗅ぎながら、早く止血しないと、とそればかりが私の頭をよぎ

つ
て
い
た。

【その炎の名は】

身の内を焼き焦がすこの感情を何と呼ぶのか、シリウスは知らなかった。

彼は生来、人に執着する方ではないのだ。

宮廷で恋愛遊戯を仕掛けられても煩わしいとしか感じず、男としての欲を処理するには後腐れのない女を選んできた。

シリウスにとって至上の行動原理は主からの命令である。

唯一無二の主君、サジタリアス国王の命を確実にかつ迅速に果たす獵犬であることに彼は絶対の誇りを抱いているし、これからもそれは変わることはないだろう。

けれど今回の任務中、予想外の事が彼に起こった。

陛下の寵姫たるミーファを奪還したのち、サジタリアスに毒針を向け続ける愚かな暗殺者どもを警戒し港町を巡回していた時のことある女を視界に捉えたのが事の発端だった。

初めは、変わった女だ、としか思わなかった。

昼下がりの的当て場は上品とは言えない男どもの熱気で混み合っていて、淡々と手を上げた若い女はそれだけで異質だった。

真っ直ぐな長い髪を一つにくくり、髪と同色の落ちついた色の瞳をした女。

その回りだけ時間が止まっているような、凪いだ湖面の如く静かな雰囲気をしていた。

女が挑もうとしていたのはかなりの難度の的だ。

もし射抜けたのなら宮廷に仕える一流の射手と比べても、なんら遜色ない腕をしていることになる。

射抜けるはずはあるまい、と思っていた。

見てみると、弦を張って立ち上がった女の瞳がふいに翳^{かげ}った。酔っ払いの戯言が耳に入ったのだろうとシリウスは推測して、何故かひどく苛立たしく感じた。

これしきの事に傷つくくらいならば、目立つ事などしなければいい。

おそらく彼女が瞳を翳らせたまま矢を放ち、的を外したならばシリウスは彼女のことをすぐに忘れただろう。

しかし彼は翳った瞳が一瞬にして光を取り戻す様を見た。自らに言い聞かせるような言葉と共に、その劇的な変化は訪れたのだ。

『それだけで、十分じゃないか』

彼の鋭敏な感覚は小さな女の呟きを捉え、その響きはひどく胸を騒がせた。

（おそらく、あの女は弱い女だ。他愛もない悪意の一つ一つを刻んでしまうような、柔^{やわ}い心の）

だが弱い心で己を律し、弓を引く姿は肺腑^{はいふ}に震えが来るほど美しく思えた。

事実、女がその細腕に似合わぬ長弓を引き絞る姿は凜々しく、彼女を馬鹿にしていた観客さえも思わず息を呑んだのだ。

欲しい、と彼の本能が叫ぶ。
あの女が欲しい。

焼け付くような渴望が瞬く間に心を占めた。

シリウスは迷わない。

彼の行動原理の第一位は主の命令だが、それ以外のことは全て直感に従っているからだ。

感覚と同様に、彼の直感は優秀で間違いを選んだことなど一度としない。

だから女を気絶させて、国王直属の部下だけが使える隠れ家に運び、とりあえず縄で縛った。

逃げられると不快だからだ。

彼は気づいてしまっていた。女を気絶させ、その体を軽々と抱きあげた瞬間、知っている『匂い』が染みついていくことに。

レグルスはシリウスが唯一共に育った兄弟だった。

クソ生意気な十三の時にクソ生意気なことを言ってボレアリス家を飛び出していった愚弟。

八年たって図体だけは一人前になったようだが、人に慣れない野良猫のような捻くれた目つきはそのまま、今も生意気にシリウスを睨みつけている。

毒も呪いも一切効かないという便利な体質を除けば、レグルスはシリウスに何一つ敵わない。そんな出来の悪い弟に睨まれようがいささかの痛痒も感じぬはずだというのに、今回ばかりは事情が違った。

全ては、レグルスの背に寄り添うように立つ女のせいだ。

彼女の存在が今まで抱いたことのない感情に火をつけ、シリウスの胸を焼き焦がす。

彼は嫉妬という炎を、生まれて初めて感じていた。

「俺は離れると言ったはずだが。聞こえなかったのか、愚弟」

「……何でお前の指図を受けなきゃならねえんだよ、シリウス」

「俺が不快だからだ」

半眼でレグルスを睨みつけ、シリウスは剣を構えた。

毒サソリをいくら斬り捨てようとも濁ることのない銀色は国王から下賜された名剣たる証だ。澄んだ刃はシリウスの凄烈な気迫を帯びて、更に輝きを増す。

対するレグルスも剣を下段に構え、牙を剥いた獣の如き殺気を放つ。

まさに一触即発。

触れれば斬れるようなピリピリとした空気が部屋に満ちそれを打ち破ったのは争いの焦点である女だった。

「すみません、兄弟喧嘩なら後にしてください」

なんだか妙に迫力のある声だった。

レグルスの背からあっさりと姿を現した女

エセルは常で

あれば無気力なほど凧いであるはずの瞳に剣呑な色を宿しており、雰囲気が一変している。

一言で言えば、目が据わっていた。

「何でいきなり殺し合いでも始めるみたいな雰囲気になってるのか知りませんが、とりあえずレグルスの手当てが先です。止血しなきゃ止血」

「お、おい……エセル？」

「黙れレグルス。とりあえず服の上からでも止血する」

言い捨てるとエセルは手巾を傷口に当て、圧迫止血法を試みる。
そうしてレグルスの背に手を当てながら、じろりとシリウスに視線をやった。

「シリウス、この状況で真っ先にやらなきゃならないのはミーファの無事の確認じゃないんですか？」

「っ！」

正論だった。

ぐつの音も出ないほど、その通りな意見だ。

（俺としたことが陛下の命を忘れるとは……）

シリウスに与えられた命令はミーファを無事に奪還することである。

敬愛する主の宝が心身共に損なわれていないかどうかを確かめ、もし万が一取り返しのつかない傷を負ってしまったのなら死を持つて償う。その覚悟はもちろんあった。

それなのに、である。

訳も分からぬほどに身の内を焼く感情に振り回されて、ミーファの存在さえ失念していたのだ。

今までにない失態にシリウスはうろたえ　　だが一瞬で冷静な顔を取り戻すとミーファに頭を垂れた。

「……お怪我はございませんか、ミーファ様。そしてこの失態、無事に陛下の元へ貴方様を送り届けたのちに如何様な処分も受けますゆえ、今は御寛恕を願いたく……」

「ふ、ふえっ！　い、いいんですよシリウス様！　わたしの事はお

気になさらず、恋の鞘当ての続きをどうぞ！」

「そのような訳には参りません」

部屋の隅っこでドキドキしながら事の成り行きを見守っていたミ
ーファは、突然こちらを向いた一同の視線に目を白黒させた。

ウサギ大慌てである。ぴよんと跳ねる仕草が愛らしい。

けれど約一名、そんな感想を持たない人物がいた。

いつもと違うエセルにちよつとびくつきながら大人しく止血を受
けているレグルスが、呆然と呟く。

「ウサギが喋ってるぞ……」

「ミーファは王族の血を引いてるんだって。……そういつの、分か
るんじゃないの？」

「アンタレスのは嫌な感じがしたからだ。クソ親父と顔も似てたし
な」

「……後で全部説明してもらえる？」

「……分かったよ」

顔を近づけ合ってこそそと話をするエセルとレグルスの姿に、
やはり怒りに似た感情が湧いてくるのをシリウスは止められない。

長年一緒にいた者同士だけが持つ親密さが、そこにはあった。

今すぐ異母弟を斬り捨てたい衝動を抑えつつ、シリウスは口を開
く。

「暗殺者をわざと逃がした甘さは腹立たしいが、借りは借りと認め
よう。この場は見逃してやる、レグルス」

「……シリウス、お前あいつがクソ親父の子どもだって気づいてた
よな？」

「当然だ。匂いと名ですぐに分かる」

「殺す気だったのか？」

「愚問だな。陛下の敵は殲滅することこそが俺の使命。……俺にはお前の甘さの方が理解できん。半分だけ血が繋がっているとはいえ、共に育ったわけでもない者に兄弟の情を感じるのか？」

「そういうわけじゃねえよ。……殺すのは気分悪いだけだ」

「そこが甘いと言っている」

昔からこの弟は愚かだったと、シリウスは回想する。

人になつかないくせに妙に人を恋しがる猫のような、矛盾した性質を持つのだ。

（そうして余計な事をぐだぐだと考える　　）

募る苛立ちを押し殺す。

現在の最優先事項はミーファを無事に王宮へ連れ帰ることだ。

女を巡ってこの場を戦いの場とするには、いつ新たな刺客が来るとも分らない今の状況は差し迫り過ぎている。

ミーファと神器を抱え、部屋を出てゆこうとしたシリウスは最後に一つ、レグルスに言葉を投げた。

「もうじき太陽が双児宮^{そうじきゆう}に入る。　その意味を知っているの
だろうな、愚弟」

レグルスはぐっと詰まり、緑の双眸の色を濃くした。

「……知ってるに決まってるんだろ。警戒はしてる」

「自分の力を過信するな。お前は出来損ないだと散々言われていた
だろうが」

「何が言いたい」

「今、俺がエセルを連れ去った方が安全だろうと言いたただけだ」

「うるせえよ。さつさと失せろ」

「口だけは一人前だな」

まあいい。とシリウスは嘆息する。

自分の脚ならばすぐにでも駆け戻ってくることができる。

異変を感じ取ったならば主の許可を仰いで戻することを心に決めつつ、シリウスはエセルの姿をもう一度目に納めると、今度こそ部屋を後にした。

痕

どうも命令には忠実っぽいシリウスがミーフアを抱っこして出て行った後、私たちもとつと不穏な空気が漂いまくる屋敷を後にした。

大量の黒サソリだった砂で空気悪いし、アンタレスみたいな暗殺者がホイホイ来るかもと思うと震えが来ますよ。

ええ、これ以上、国家規模の危険事態に巻き込まれてなるものか。ちなみに愛用の弓だけは回収した。

寝室の隣の書斎っぽいところのテーブルにあつて、探す手間もかからなかったのが救いだ。新調したばかりの肩掛けベルトを手に取り、弓道具一式を抱きしめたらレグルスに「お前、弓に関することだけはテンション高いよな」とツツコミを入られた。

……うるさいな！

そんなこんなで無駄に広い貴族の館（だと思う）から脱出し、夜明けが近い白み始めた空の下を二人てくてく歩いて、無事、宿に帰還したわけである。

目を血走らせた自称宿屋の看板娘が入口で待ちかまえているかも、という心配は杞憂に終わった。下働きの小僧もまだ眠っているのか、ネズミの気配しかない食堂を通り抜け、誰にも会わずに部屋に戻ることができたのだ。

よし、ついでる。

とてもとてもハードな夜すぎて、勘違いに基づくジェラシーファイトをかわす余裕すらなかったのだ。

ああ……ハードだったなあ……。

拉致られて縛られて、衝撃の事実を聞き、ウサギがしゃべり、暗

殺者に大量のサソリをけしかけられたし殺されかけた。

……他人に話したらまず間違いなく頭のおかしい人扱いされそうなレベルに一般的ではない夜だった。

正直な話、体力・気力共に限界が近い。

部屋に入ってベッドを見た瞬間倒れこみたい衝動を抑えるのに苦労したほどだ。

それなのに、ああそれなのに。

何でだか私たちは不毛な争いをしていた。

*

*

*

「だから手当てなんて必要ねえ傷だって言ってるだろうが！」

「そんなわけない。そんなわけはないよ、レグルス。だって血がだらだら出てたし」

「もう止まった」

「そりゃ縛って止血してあるからね！ 決して治った的な意味合いではないよね！」

現在、レグルスが駄々をこねております。

傷の手当てをしたくないとか何とか。迷惑極まりない、真面目に疲れ過ぎて充血しているだろう目でにらみつけてやれば、ぷいっと視線を逸らされた。

……………子どもか！

「……こんな浅い傷、ほっときゃ治る。言ったら、俺に毒は効かねえ」

「毒は効かなくても化膿するかもしれないし。きちんと包帯巻いと

かないと傷口がひきつれてひどい痕^{あと}が残るよ」
「別に気にしねえよ」

そう言っただけ自分のベッドでさっさと休もうとする奴に、ぷちんときた。

さっきから私、沸点低いなあ。
きつと疲れてるんだ。変な人に出会いすぎて。

レグルスが何故、手当てするのを嫌がるのかに心当たりがないわけじゃない。

私は口元に嫌な笑みを浮かべつつ、レグルスににじり寄った。

「……へえ？　じゃあもつともつと軽い『痕』のことなんか尚更気にならないはずだね？」

「……………何が言いたい」

「別に。キスマークを見られたくないから、上着脱ぐのさっきから嫌がってる人にどこの乙女だよってツツコミ入りたいだけ」

「……………っ！」

尻尾踏まれた猫みたいに、レグルスの毛髪が逆立ったように見えた。

見開かれた緑色の瞳が綺麗すぎて、そんなに予想外だったのかと毒づきたくなる。

「宿屋の看板娘、あの赤毛で色っぽい子に迫られたんでしょ。何でもそーゆーことは隠したがるのか知らないけど、気にしないからとにかく傷の手当てさせて」

「……………いつから気づいてた」

「旅のわりと最初の方から。隠してるから知らんふりしてたけど、意味ないねこれ。つか、レグルスも男だし、禁欲主義でも何でもな

いんだから普通のことじゃないの？」

軍隊に長くいたから、男は女が欲しくなる生き物だって知っている。

むしろ健康な男なら自然の摂理だし、据え膳食わぬは男の恥って言葉もある。

私が一応女だから遠慮しているのか、来る者拒まずなレグルスは私には知られないようにしていたらしいが。今まで随分長い旅だったのに、本当に隠せていると思うていたらしいことに笑いがこみ上げてくる。

「だから別に今さらキスマーク見たくらいで騒いだりしないし。もう眠いし。……早く傷を見せて。ケンカするのもしんどい」

心の底から面倒くさそうに言ったのが効いたのか、レグルスは苦虫を噛み潰したような顔をしていたけれど大人しく上着を脱いだ。ベッドに腰掛けた奴の隣に座り、私はとっと手当てを始める。なんだか先刻よりも更に疲れていた。

その傷は右の肩甲骨近くにあった。

レグルスが自分で言っていた通り、傷自体は浅い。止血のためにきつめに紐で結んでいた手巾を外しても、もうほとんど血も滲みだして来なかった。

ナイフが刺さったと言っても、投げやすいように加工された……殺傷力は毒にまかせた刃は本当に小さなものであったらしい。

この分なら変な後遺症も出ないだろうことにひどく安堵した。そりゃそうだ。私なんぞをかばったせいで負った傷なのだから、重傷であつたら夜も眠れないほどの罪悪感に苛まれるだろう。

水差して傷口を清め、純度の高い酒……アルコールで消毒する。旅のついでに摘んでいた薬草をもんで清潔な布で包んだものを傷

口に当て、その上から包帯をぐるぐる巻いて、出来上がり。

黙々と作業したおかげで、あつけないほど手当てはすぐ終わった。手当て完了と告げようと顔を上げた瞬間、傷だけ見ていた時には気づかなかった諸々が目に飛び込んできて息を失う。

それほどに目の前にいる生き物は美しかったのだ。

宿屋の安っぽいランプの赤い灯のためいつもよりも色が濃く見える金髪は炎を反射してゆらめくように輝く。

私が適当に切っているせいで不揃いな毛先が首筋を過ぎ、無造作に肩口に掛っている。

獅子のタテガミみたいだ。豪奢で、勇壮な。

獅子を連想させたのは髪だけではない。

何もまとっていない上半身はしなやかな野生の肉食獣そのものの優美さを備えていた。

広い肩幅に、引き締まった筋肉のついた逞しい腕。

無駄なものなど何一つない背中では、包帯が巻かれているにも関わらず、そこにみなぎる爆発的な力強さを感じさせた。

長剣を自在に繰り出すためにある剣士の体だ。

軍にいた頃から、どれほどレグルスが厳しい鍛錬を積んできたかずっと見てきた。

時を重ねるごとに増す強さも。

けれど力強い剣技を生み出す体が、これほど美しいものだとは。

……いや、想像は何度かしていた。

レグルスが行きずりの女を抱くたびに、振り払ってもつきまとう曖昧模糊とした想像。

思えば私がレグルスに本格的な手当てをするなんて、初めて出会った15歳の時以来になるのだ。パイシーズで軍にいた頃、レグルスに手当てを施す役回りは私にまわってこなかったから。

六年前は確かに少年だった身体は、しなやかに強い大人の男のものに成長していた。

「おい、エセル？」

しまった。

すっかり身惚れていて、じっくりしっぴかり眺めまわしていた。

後ろを振り返ったレグルスの顔が、私を凝視して固まる。

……やばい、変態みたいに観察していたのがばれたのか！？
慌てて他に傷はないか確認してただけだとか、もっともらしい言い訳を紡ごうとしていたのに、地を這うみたいな低い声に遮断されてしまう。

「……………おい、耳の後ろにある、その紅い痕あとは何だ」

紅い痕？

反射的に思い出したのはシリウスに首筋をなめられたこと。
いやいやいや、あれは首だし。なめられただけだし。

きつと虫にでも刺されたんだよ。

そう、言おうとしたのに。

私の口が何かを言う前に、私の身体は凶暴な速さで押し倒されてベッドに沈んでいた。

反射的につぶってしまった目を開くと、間近にあるのはレグルスの顔。

女なら誰でもうつとりすること請け合いの野性的な美貌は、爛々
と光る緑の双眸そうまうがあまりにも凶悪なせいで獰猛な獣そのものに見え
た。

「答える。シリウスに何された」

押さえつけた獲物の喉首に食らいつくのを堪たえているような、獣
の低い唸うなり声。

声が孕はらむ怒氣に竦すくんで、息がうまく、できない。

【抱えた理由、消える理性】

手当てを施されている間ずっと、なぜエセルはこんなにも無防備なのだろうと、苛立たしい思いがレグルスの心を占めていた。

明け方が近いとはいえ、夜。

長い間共に旅をしてきた間柄とはいえ、男と女だ。

そうして治療のためとはいえ、ベッドに腰掛けた男の裸の上半身にエセルはこだわりもなく触れてくるのである。

エセルの指が素肌に触れるたびに走る甘い痺れが、レグルスの身の内にある欲に火をつけていくというのに。

（……男がどういうもんなのか、全く知らないわけじゃないとその口で叩いておいて……）

レグルスはエセルが男女の機微に全く関心がなく、とんと理解していないと思っていた。

何しろ金もつたいたいからと言ってベッド一つの部屋を取ろうという女なのだ。

野宿での添い寝に関しても、そう。

寝息を立てるエセルの顔を見ながら、自分がどんな思いで堪えていたかということなど考えつきもしない。

夜の西風が運んで来る悪夢からエセルを守りたいと願った。

己の身に巢食う欲望を押し殺して、エセルに取りつこうとする悪夢を威嚇し追い払い続ける夜。

浅い睡眠は、夜が明けた後の深い眠りで補ってきた。

レグルスの寝起きが最凶に悪いのはそのせいである。

エセルに呪いをかけたテオドールはジェミニ双王の片割れとして十分な力を有していた。

ジェミニは北大陸の西端に位置する国。

王族は双子の神の血を引き、双児宮の星々から加護を得る。

双児宮は風のエレメントを司り、エセルを狙い澄ましたかのようにジェミニから吹いて来る『風』はひどく彼女を蝕むものだった。

王族としての顕著な力を持たないレグルスに取れる方法は二つだけ。

一つは、双児宮とは対極をなす人馬宮の加護を受けるこの国サジタリアスへエセルを連れてくること。国土には悠久の時、星の光がしみ込んだ蓄積があり、国独自の力に守られている。サジタリアス国内であれば、ジェミニの呪いは軽減されるのだ。

二つは、悪しき『風』をエセルに寄せ付けないこと。

能動的な力をほとんど持たない代わりに、レグルスの身体は抵抗力が異常に高かった。毒はもちろん、呪いの類の一切を無効化しはね返す。その血が放つ一種の『結界』を寄り添うことでエセルに被せ、彼女を呪いから守ろうとした。

長い旅の間、レグルスはエセルを守るために全力を注いでいた。

だが人間の三大欲求に抗い続けるのは限界がある。

睡眠欲は朝寝で補うこともできるし、軍隊時代で培った耐性で乗り切った。

しかし性欲に関しては話が違った。

野宿の時は寄り添って眠り、宿を取る時もあまり離れていては呪いに対する結界の外に出てしまう可能性があるのも一つの部屋で寝る。毎日毎日、愛おしいと思う女が近くにいるというのに手を出してはならない。

いったいどんな拷問だ、これは、とレグルスが思ったことは数知れない。

理性が切れかかったことも一度や二度ではないのだ。

だからエセルを襲わないために、寄って来た女を適当に抱いて性欲を発散させていた。

パイシーズにいた頃、隊長が過保護なくらいに周囲の男どもに圧力をかけて守っていたせいか、エセルはどうも危機意識に欠けるところがある。

だから注意していれば勘づかれることはあるまい、と夕力をくくっていたレグルスにとって先ほどの言葉は衝撃だった。

『旅のわりと最初の方から。隠してるから知らんふりしてたけど、意味ないねこれ。つか、レグルスも男だし、禁欲主義でも何でもないんだから普通のことじゃないの？』

いつも以上に感情の抜け落ちた、淡々とした口調。

言外に私は全く関係ないけど、と言い放つ態度に苛立ちを感じたレグルスは身勝手と責められるべきなのだろう。

それでもずっと続いているエセルへの苛立ちは増すばかりで。

正直に言えば、この時点で限界ギリギリだったのだ。

レグルスは昨日の午前中に迫って来た宿屋の娘を抱いてはいない。あまりにも聞き苦しいエセルに対しての罵詈雑言をあの娘が吐いたせいだ。

腹立たしいことにレグルスは肩口に数か所、痕をつけられており、それでも抱いていないと主張することは説得力がなさすぎるので止めた。

他の街で女を抱いていたことは事実なのでいつそう白々しいからというもある。

国境の森林地帯を越えるために街に来るのは久しぶりだった上に、発散しようと思った矢先に止めたためレグルスの飢餓感は募っていた。

加えて、治療を受けている今は、暗殺者との戦闘を終えた後である。

戦闘がもたらす高揚感は理性を容易く突き崩す。

だから無意識のうちに、レグルスは考えないようにしていたのだ。シリウスがエセルに対して何かをしたのではないかという可能性を。

レグルスにとって、シリウスが女に対して性急に事を進めるといふ想像はしにくかったというのもある。昔からシリウスは何事にも冷静で、人に執着しないタイプだった。

理性の限界が近い、というのをレグルスは分かっていた。

嫌な可能性を考えないようにしていた。

エセルを見ないようにして欲望から目を逸らし続けた。

それでもエセルの指先が、背中に触れて
やがて手当てが終わったのか離れていく。

レグルスは手当ての完了を告げる声を待った。

その声を合図に、彼女を見もせずに眠ってしまおうと思っていたからだ。

そうすれば、我慢できると、思っていた。

空いた間を不審に思って振り返ってしまったことが、最後の砦を破壊した。

エセルはレグルスと同じくベッドに腰掛けていた。

手当てが終わってぼんやりしていたらしいエセルは、レグルスと目が合うと何故だか慌てて首を振ろうとしたのだ。

結いきれない横髪がさらりと揺れて、左側の首筋が見えた。
見えてしまった。

耳の後ろ。柔らかな白い皮膚に散る、紅い痕が。

まるでこの女は既に自分のものになったのだと主張しているよう

な、所有印が。

全身の血が沸騰したようだった。

決壊した激情のままに、レグルスの身体は動いた。

気がつけば真下にあるのは愛おしい女の顔。

「答える。シリウスに何された」

喉の奥から獣の唸り声のごとき低音がもれて、本当に己が野に生きる一匹の獣であったなら、とレグルスは思った。

寄り添って眠る時、エセルに何度口づけようと思ったか分からない。

けれど、そのたびに堪えた。

堪えるしかなかった。

一度でも口づけてしまえば、我慢は利かない。

なし崩しに全てを奪いたくなるだろうから。

けれど自分以外の男がエセルにつけた痕を見れば、長年の我慢を嘲笑うように呆気なく、理性は崩壊した。

本能のままの目線で見てみれば、エセルの怯えた顔はひどく扇情的に映る。

血の気の引いた白い頬も、小刻みに震える顎も……追い詰められた鹿みたいに怯えた瞳も。

こんなエセルの瞳を、レグルスは見たことがあった。

レグルスがパイシーズの軍に入って間もない頃、一対一で向き合えばエセルは必ずこんな怯えた瞳で彼を見たのだ。

そのくせ隊長の傍にいる時だけは安堵の笑みを浮かべる。

何年も軍にいる内に流石にレグルスにも慣れて、そんな瞳を向けなくなったので彼自身すっかり忘れていたのだ。

レグルスは瞬間的に笑いだしたくなった。

隊長のように信頼を寄せられることなど、始めから無理な話だったのだ、と。

（我慢して我慢して、それでいいだった？……もういい。この女が未だに隊長のことを想っていようが、知ったことか）

凶暴な衝動そのままに、レグルスはエセルの唇に噛みついた。

【抱えた理由、消える理性】（後書き）

補足事項

国に関することですが、皆さんお察しの通り、星座の名前がついています。

パイシーズ……魚座（双魚宮）

ジェミニ……双子座（双児宮）

サジタリアス……射手座（人馬宮）

スコルピオン……蠍座（天蠍宮）

なお黄道十二星座と十二宮は違うものですが、このファンタジーな世界では空に浮かぶ星座と十二宮の領域はほぼ一致しているという設定です。

なので作中では人馬宮＝射手座のある領域、とイメージしてください。

各国は名を冠したそれぞれの星座からご加護をもらっています。

詳しくは作中でおいおい説明する予定ですが、今回の話が意味不明にならないことを祈って補足しました。

心臓の真上

熱い。

自分がどろどろに溶けてなくなりそうに熱くて、訳が分からない。

唇がひりついて痛い。

レグルスが噛みついて、そのまま味わうみたいに口に含んだり舐めたりしたせいなのは分かる。

分からないのはそのあと。

美味しいわけないのに執拗に唇を味わわれて、呼吸も忘れていたのが悪かったのだろうか。

空気を求めて開けてしまった口に待ち構えていたかのようなタイミングで強引に舌が入り込んできて、呼吸が更に苦しくなった。

落ちつけ、私。

隊長も言ってたじゃないか。あせった時こそ鼻からゆっくり息を吸い、臍の下で溜めてゆっくりと口から吐き出す。

………口から息を吐き出せません、隊長！

元同僚によつて塞がれております！

いやいやいやいや、落ちつけ。鼻から吸って鼻から吐けばいいだけだ。

口を塞がれたら完全鼻呼吸すればいいじゃない。それで万事解決する。

いや、訳が分からない状況は何ひとつ解決しないけどね！

「……ん、う……っん」

口腔の奥からもれる自分のうめき声は、何だかひどく鼻にかかっていた。

当たり前じゃないか。息が苦しいんだ。

さつきから歯列をなぞったり私の舌を抑え込んだりとレグルスの熱い舌が好き勝手してるせいで。

思考が、溶かされてく。

訳が分からない。

レグルスが何でこんなことをするのか、訳が分からない。

ふいに奴の舌が口から出て行って、ばやけるほど近かったレグルスの顔がクリアになる。

熱を孕んだ緑の双眸は、雨上がりの五月の森みたいに濡れたように光っていた。

ああ、きれいだ。

レグルスは本当に、美しい瞳を持っている。

溶けた思考で悠長にもそんなことを思う。

さつきまで見下ろしてくるレグルスの視線を怖いと感じていたというのに。

怯えを見せた瞬間に、レグルスが見せた肉食獣の笑みがとても恐ろしかったのに。

……… 内臓を食い散らされる運命にある草食獣の気持ちを味わったというのに。

頭が痺れたように重くて、美しい緑をもっと見ていたかった。

ぼんやりと見つめていると緑の双眸がとまどったように見開かれて、数度瞬く。

何かを問いかける気配を瞳にたたえて、再びレグルスの顔が近付いてきた。

先ほどより幾分柔らかく、唇が重なる。

その熱に訳も分らない内に泣きたくなった。

レグルスはゆっくりと口元からたどるように、私に熱を与えていく。

口の端へ、頬へ、顎へ、喉へ。

喉元をくすぐる舌先に、首が弱い私は悲鳴をあげたのにそんなことは意に介さない。

傲慢なレグルスらしい強引さで、舐めたり甘噛みしたりする獣みたいな口づけを落としていく。

首筋を征服し終わると、次は肩へ。

いつのまにかシャツは肌蹴られていて、素肌の肩先にレグルスの堅く大きな手のひらを感じる。

正直、得体の知れない感覚が背筋に走りぬけていて、声を抑えようとするのに手一杯だ。

鎖骨を柔らかく噛んだ口が、私の身体の中心をたどるように下に降りて

唐突に、動きを止めた。

「この印は……」

かすれた声を出して、レグルスが触れたのは心臓の真上だった。命を刻むリズムが脈打つ場所。

……………ん？

いやいやいやいや、待て待て待て待て。

ちよい待て、そこ胸だから。

どんなに薄くてもダイレクトに胸だから。

貧相な胸に対するコンプレックスは溶けていた思考を一瞬で引き戻して再構成してくれた。

上体をがばつと起こす。

起こせたのは、レグルスがもう肩や腕を抑えていなかったためだ。私はこれ以上、洗濯板と見まがうような胸を観察される前に、素晴らしい速度で後じさり、ベッド上で距離を取る。

レグルスを見やれば、先ほどとは全く違う瞳で呆然と私を見つめていた。

「その印は、いつからあった？」

「印？」

「心臓の上の……ジェミニのアストロロジカルシンボルのことだ」

何ですかそれは。

かき寄せたシャツの隙間からちらりと見れば、盛り上がりにあまりにもかける胸に灰色の痣があった。

……文字が数字のような。砂時計に似ているような形だ。

「ああ……そういやうつすらと瘧みたいなのが三日前からあったよ
うな……」

「三日！？　なんでそれを俺に早く言わない！」

「いや、でもこんなにはつきりした形のある瘧じゃなかったし。弓
の稽古中にぶつけたのかなーとか思ってたから」

その言葉にレグルスは低く唸った。

怒りは感じるけれど、さっきまでの得体の知れない色気のある雰
囲気とは違う。

いつもの、自分に対しての苛立ちを噛み殺しているようなレグル
スの表情に、場違いにもほっとしてしまふ。

訳の分からない熱のやり取りの理由を、問いただすことは怖かつ
た。

苛立ちを鎮めようとしたのか、レグルスは一度目を閉じた。

そうして私をその緑の瞳で射抜くと、いつにない真剣な声で言う。

「エセル。体の具合がおかしいとかないか？　嫌な夢を見るとか」

「え？　いや特に何も」

色々ありすぎて疲労困憊してはいるが、至って健康だと思う。

その気の抜けた返事に、レグルスは軽く息をついた。

とりあえず少し安堵したようだ。

そのまま腕を組んで、何やら思案していたが長くはかからなかつ
た。

包帯の上から手早く上着を着て、ブーツの紐を結び直しながら宣
言してくる。

……完全に出かける姿勢だ。

「エセル。用意ができしだい、すぐにでも出発する」

「……………はい？ え、でもまだ八日は滞在する予定で。宿にも前払いしてあるし」

「俺が早馬と食糧の調達をしてくるから、お前はここで寝てろ。体力の回復をしとけ」

「って、レグルスの方が怪我人な上よっぽど疲れてると思うんだけど！？」

「馬鹿にすんな。問題ねえよ。……それより、お前のことだ」

耳に心地よい低い声が、更に一段トーンを下げる。

すっかり身支度を整えたレグルスがまだベッドの上で座り込んでいる私に近付いて、真剣な眼差しを向けてきた。

先ほどの熱が、一瞬ぶり返して身を引きかける。

「頼むから、逃げないでくれ。逃げられても仕方ねえことしたのは俺だが、今は。……今は、お前の命が危ないんだ」

「……………え？」

「ジェミニの呪いはおとぎ話じゃねえ。王族の力自体が、伝説の存在ってわけじゃねえんだ。お前も見ただろ。あの暗殺者の小僧がサソリ操ってんのか、ウサギがしゃべんのか反則技な現象を」

まだ記憶に新しい大量の黒サソリが頭をよぎり、慌てて頷いた。

「胸の痣は、おそらく呪いの徴候だ。俺の力じゃ、お前を……………」

言葉の最後はかすれて私の耳に届かなかった。

ひどく悔しそうなレグルスの顔を見て、隊長にぼろぼろに打ち負かされた時よりも悔しそうだ、と呑気な感想が出てくる。

だって、呪いとかぴんと来ない。

……いや、もしかしたら信じたくないだけかもしれないが。

「とにかく、すぐ準備してくる。お前は出発前に少しでも寝とけ」

「……出発するって、いったいどこに？」

私たちは特にあてのない旅をしていたはずだ。

……自信がなくなってきたのは、レグルスに何らかの意図があったサジタリアスに来たのだろうってことが分かったから。

怪我を感じさせない俊敏な動きで部屋を出て行くつもりでいた背が止まる。

振り返らずに、レグルスは告げた。

「カウス・メディア。……この国の王都だ」

黄昏に見る悪夢

サジタリアス国王は、智慧を司る人馬ケイロンの末裔。
特に当代の国王陛下は傑物との噂がとどろいており、その類まれな手腕は国のすみずみにまで及んでいるという。

……ウサギなミーファを側室にしているお方だが。
いや、本来はミーファも人になれると信じてはいるんだけど、見たことないからイメージはウサギのまんまですよ。

ともかく、整備の行き届いた街道というのもサジタリアス国王陛下の賜物なわけで。

馬車のために敷かれた石畳は凹凸が少なく、街道沿いの宿場町には盗賊対策のために王都から警備隊が配置されているらしい。早馬をかつ飛ばしてる時、巡回中の騎士と何度かすれ違ったから、盗賊もこれじゃあ割に合わないだろう。商人や旅人を狙おうものならすぐに連絡され、近場の宿場町から来た騎士にふるばつこにされること確定だ。

そんな理由でサジタリアス国内の旅は楽に進む。

まあ距離が距離だから、交易都市サディラから王都カウス・メデアまで早馬で急ぎに急いで、七日というところらしいけど。

宿屋の看板娘の心底忌々しそうな舌打ち（レグルスにも向けられていた）を背に、出発してから早三日。

中間点にある大きな宿場町で、『それ』は起こった。

*

*

*

旅人相手に商いをする店が立ち並ぶ通りは、人でごった返していた。

干し肉やドライフルーツを売る乾物屋、傷に効く軟膏をさかんに宣伝している薬種商、すでに出来上がった簡易な服も商っているらしい布屋。そういった旅の必需品を売る店の合間に、安い飯屋兼酒場が挟まれており、そちらの呼び込みは相当元気であるらしい。

まだ夕暮れ時だがお早いことに酔っ払い共の笑い声が響いて来るから、それに負けないよう声を張り上げざるを得ないのだろう。

「……まったく、宿で休んでろつつたのに……」

「やー、でも買い出しをまかせっきりにすると収まりが悪いとか何というか。レグルスが買うとどうも豪快な買い方で、無駄が出そうで嫌というか」

「どう考えても後のが本音じゃねえか」

ぎろり、と眼光鋭く睨まれては苦笑するしかない。

レグルスの放つ不機嫌オーラは雑踏を割れさせる作用があるので、歩くのが非常に楽だ。

今、大慌てで避けたそのお兄さん、気持ちはよく分かります。下手にぶつかったら斬り殺されそうですからね！

「サデイルでは買い物まかせたけどさ……干し肉ばかり多く買って自分に本当に必要な傷薬とか買っていないっていう信じられなさだったからね……」

「深々と溜息はくな。あのぐらいの傷、もう痛みもねえよ」

「レグルス、その無意味に虚勢はる癖やめようよ。傷口からの化膿が一番怖いのは、軍時代から分かってることなのに」

こればかりは目を合わせて真剣に言う。
見上げるほど高い位置にある緑の目は、案の定、ますます不機嫌
そうに細められ……ぷいっと逸らされるかと思っただのに、今回は気
遣わしげな光を浮かべた。

「……それよりも、お前は何ともねえのか？」

思い出すだに顔から火が出そうな出来事以来、レグルスはこうい
った問いを何度も繰り返している。

それに対する私の返事は、いつも同じ。

「何ともないって。健康そのもの。何なら今からの賭けでも
しょうか」

「……………あの印の色は、濃くなったりしてないな？」

「変わらないよ。灰色のまんま」

嘘だった。

心臓の真上にある不気味な痣は、時間がたつごとに濃くなってい
る気がする。

今はもう、黒に近いのではないだろうか。

何を隠そう、無意味に虚勢を張っているのは私の方だった。

ここ数日、全方位を警戒している雰囲気のレグルスに、これ以上
の負担をかけるのが嫌だったから。……違うか、自分のためだ。

口に出せば、黒い痣からしみ出た毒が全身を駆け廻る。

そんな予感がして、呪いを現実のものと認めるのが怖くて、逃げ
ているのだ。

痣と、恐怖心以外、呪いめいたものは今のところない。
平気だ、と笑ってさえいれば、まだ大丈夫な気がしていた。

それが何の根拠もない思い込みだと、すぐに思い知らされるとも知らずに。

*

*

*

ふと、何かを感じて横を向くと、一人の子どもが私を見ていた。雑踏をすり抜けて射抜いて来る視線に、思わず歩みが止まる。店と店の間、人が一人ようやく抜けられるような路地に立った子どもは、ひどく痩せた身体にボロボロの服をまとっていた。

戦災孤児？

いや、パイシーズと違ってサジタリアスは孤児院など福祉もきちんと行っていると聞いた。

浮浪児が全くないとは言えないが、それでもあんな今にも死にそうなほど痩せこけた子どもがいたら助けてやろうという人がいるくらいには、この国は豊かだ。

この宿場町も整備された街のひとつで、旅人の活気に満ちて雑然としている割には治安も良さそうだというのに。

不自然さに、目が逸らせない。

子どもは、ざんばらに切った焦げ茶の髪の間隙から、私だけをしっかりと見つめている。

こけて落ちくぼんだ目も、髪と同じ暗い色。

煤で汚れた顔は男の子か女の子か判然としない。

けれど子どもがニッと、口の端をつり上げた瞬間。耳元に宣言されたようにはっきりと、分かってしまった。

あれは、私だ。

私だった。

11歳の時の、痩せこけて、死にかけていた時の、私。
隊長に拾われる直前の、拾われるのが一日遅かったら飢え死にしていただろう私。

子どもの私はなぜか、弓を手に使っていた。

長弓なんかではない。

村にいた頃、狩りに使っていた短弓。

父親からもらったそれは、村が焼き滅ぼされた時に燃えてしまっ
たはずだったのに。

子どもらしくもない、邪気に満ちた笑みを浮かべながら、『私』
は矢をつがえた。

やけに禍々しく光る鏃^{やじり}は、真っ直ぐに私だけを狙っていて。

雑踏を行き交う人々は、薄い影だった。

全てをすり抜けて、矢は私の右手を貫いた。

絶叫をあげたはずなのに、何も聞こえない。

夕暮れ時の赤いはずの空気が、やけに白くて。

全ての音が遠くて、無音の世界に閉じ込められたような現実感の
なさ。

それなのに、痛みだけは途方もなく鋭かった。

顔をかばうように突き出したためか、矢は手のひらから甲へ貫通

している。

そう、認めると、ぐ、と吐き気がした。

「う……あ、あ……っあ、うあ」

意味をなさないうめきが、喉からもれる。
痛い。

手のひら、矢を、うあ、抜かないと、でもどうすれば。

右の指を動かすと、飛び上がるほどの激痛が走った。

声にならない絶叫を上げて、しゃがみこんだ所に、また矢が。

刺さる。

右の肩口を押さえていた左手を、そのまま縫い止めるように。

刺さる。

左肩の、浅い位置に。

わざと、急所を外すような、狙い。

獲物を、いたぶって、いる狙い方。

子どもの笑い声がする。

幼い『私』の声で「もっと刺さるよ」と。

「お前が射殺^{いころ}してきた人間の数だけ、矢が刺さるよ」

楽しげに楽しげに、わらべ歌を口ずさむように。

あまりの恐怖に、私は

「い、おいつ！ エセル！ 聞こえるか！」

レグルスの声が聞こえた瞬間、金色の光が私の中に流れ込んで来た。

冷たい鋭い痛みの檻を壊して、私の中へ。

温かな、まばゆいほどの金色の、力の奔流。

レグルスの、まとう生命力、そのものが。

「……………れぐ、るす？」

「エセル。俺が見えてるな？ 息は？ ……わりい、とにかく今はゆっくりと息をしろ。しゃべんのは落ちついてからだ、いいな？」

温かった。

広い胸板が頬にあたっていて、レグルスの鼓動が聞こえた。

迷子になった子どもを抱き締めるみたいに、もう見失うまいとばかりにしっかりと抱き締められて、温かい。

痛みの残滓^{ざんし}が、溶けて消えていく。

レグルスの大きな手のひらが頬をぬぐって、そこでようやく、自分が涙を流していたことに気づいた。

「大丈夫か？」

「……………うん。……………さっきの、あれは、私は……………」

「……………とにかく、場所を移動する。首の後ろに手えまわせ。しっかりつかまってる」

レグルスの腕が私の膝裏と腰を支えて、抱きあげた。
金色の光が離れていくと、またあの痛みが襲ってくる感覚がして、
私は思わず首筋にしがみついてしまう。
そんな私をあやすように、レグルスは言う。

「エセル。大丈夫だ。俺が触れていれば呪いは抑えられる」

「……レグルス、私は、どうなったた、の」

「お前は突然、真っ青になって倒れた。……何を、見た？」

「……子どもの、頃の私が。私に矢を……痛みが。とても、痛くて
……」

「分かった。悪かった。それ以上言わなくていい。……それ以上、
思い出すな」

自分が斬りつけられたみたいなのレグルスの声に、心臓がぎゅっと
縮む。

痛みを、伝染させたいわけじゃない。

苦しまないでほしい。

「印の色はもう……黒いんだな？」

「……うん。ごめん」

「謝んな。……俺がわりいんだ。お前に全部話すのが嫌で、そのく
せまだ灰色なら大丈夫だと思いたがった、俺が」

雑踏のざわめきも徐々に遠くなって、私たちに沈黙が降りた。
濃くなっていく夜気の中、レグルスの温もりにすがっている自分
に気づく。

いや、それはもうずっと、前から。

追放された直後から、私はこの熱にすがり続けていた。

他の女を見ないでほしいなんて、そんな思いすら表に出せないほどに、レグルスが離れて行くことが、怖くて。

いつのまにか宿屋の部屋で、私は柔らかくベッドに下ろされた。しがみついていた腕を離すと、レグルスは手を握ってくれた。

「あれは、ジエミニの呪いなの？」

「ああ、そうだ。呪いが発症すると幻覚を見る。……お前が見たものは、全てまやかした」

「……なんだか、すごい眠い……」

「寝てろ。俺が傍にいる。悪夢なんざ追い払ってやるから、安心してけ」

繋いだ手のひらから、じんわりと金色の熱が流れ込んでくるのが分かる。

不思議と、ずっとずっと前から、この光に守られてきた気がして、ひどく安心できて、ひどく眠い。

痛めつけられた精神が、休息を欲するように。

私の意識は、夢も見ない深い深い淵^{ふち}に吸い込まれていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7980w/>

星を射落とす日

2011年11月12日23時44分発行